

## スバス・チャンドラ・ボースの再評価

堀江 洋文

今回の人文研総合研究旅行では、日本との関係も深く反英独立闘争で指導的役割を担ったインドの政治家スバス・チャンドラ・ボース（以後スバス）を記念して設立されたネタージ・バワン（Netaji Bhawan, ネタージ記念館）を、クリスマス休日後の12月27日に訪問した。訪問の目的は、展示物の見学や史料調査の他に、面会の約束が取れた同館館長スガタ・ボース教授（Sugata Bose）と懇談するためでもあった。2007年の第1次安倍政権時のインド訪問では、安倍首相も同館を訪れている。この記念館はネタージ・リサーチ・ビュロー（Netaji Research Bureau）によって運営され、博物館、アーカイヴ、図書館を備えている。スガタ・ボースは、*His Majesty's Opponent: Subhas Chandra Bose and India's Struggle against Empire*等の著書を上梓しスバス専門家としても知られるが、*A Hundred Horizons: the Indian Ocean in the Age of Global Empire*に見られるように、インド洋コミュニティーというスケールの大きな史的・地理的観点から歴史描写を行う歴史家でもある。<sup>1)</sup> スガタの父は記念館の事実上の創設者でありスバスに関する著書もあるシシル・クマル・ボース（Sisir Kumar Bose）であり、祖父は、スバスが信頼した実兄サラト・ボース（Sarat Chandra Bose）である。即ちスガタにとつ

<sup>1)</sup> 「海洋史」あるいは「歴史の中の海洋」といった史的アプローチは、これまでもニコラス・カニー（Nicholas Canny）の「大西洋史」やフェルナン・ブローデルの「地中海史」、チャウドゥリ（Kirti N. Chaudhuri）の「インド洋史」等で知られているが、本来海洋史のアプローチは、地方史、国史、帝国史、海洋史等を抽象に陥ることなくどのように組み合わせるかという難しさがあることが指摘されている。スガタ・ボースは、イマニュエル・ウォーラスティンの提唱する世界システム論のようなマクロ的議論に疑念を抱き、このようなマクロ的展望と各地域の特異な状況を精査する視点の中間に位置する「地域間アリーナ」（interregional arena）という概念を紹介している。グローバル・ヒストリーの視点に共鳴しつつもその限界をも注視した態度は、*A Hundred Horizons*の各所に見られる。*A Hundred Horizons: the Indian Ocean in the Age of Global Empire* (Cambridge MA, 2009 paperback), pp. 1-15, 272-82. この書におけるスガタ・ボースの語りの巧みさは、彼のスバス伝 *His Majesty's Opponent: Subhas Chandra Bose and India's Struggle against Empire* (Cambridge, MA, 2011) にも受け継がれている。今回の総合研究旅行では、スガタの他にシャンデルナゴル研究所長のリラ・ムカージー（Rila Mukherjee）教授とも学術交流の機会を得たが、奇しくも彼女自身 *Network in the First Global Age, 1400-1800* や *Oceans Connect: Reflections on Water Worlds Across Time and Space* の編集でも明らかなように、海洋史（或いはコルカタやシャンデルナゴルを流れるフーグリー河等の河川を含む水域史）の分野でも広く知られた研究者である。研究対象はインド洋や大西洋にも及ぶが、中心はベンガル湾とそれを囲む地域である。ムカージーにとって海洋や水域とは、その後背地、陸地、高台等も含めた地域であり、「大きな歴史像」所謂ビッグ・ヒストリーに流されることなく、周縁の日常的要素やインフォーマルでより小さな港湾等にも関心を示して歴史叙述を行っている。例えば 'The struggle for the Bay: The life and times of Sandwip, an almost unknown Portuguese port in the Bay of Bengal in the Sixteenth and Seventeenth Centuries', *História Revista da Faculdade de Letras, Universidade do Porto, Série III, vol. 09, pp. 67-88.* ベンガル湾も同様ではなく、ムカージーはその地域性に着目し、ベンガル湾海洋史を湾北部の河畔地域も含めて考え、伝統的ベンガル湾海洋史における焦点の分散を試みている。R. Mukherjee, *The Northern Bay of Bengal, 800-1500 C.E.: A history apart?* (New Delhi, 2013), NMML Occasional Paper History and Society, New Series 23. 宗教の違いを超えてベンガル人としてのスバスの思想を考えるに当たり、このような視点からのベンガルの地域性の研究は欠かせない。

てスバスは大叔父に当たる。スガタは、現在ハーバード大学で歴史学教授として教鞭をとりつつ記念館の館長を務めているが、2014年からはコルカタの南に位置するジャダヴプール選出の国会議員になっている。ジャダヴプールにはアマルティア・センがケンブリッジ大学に移る前に教鞭をとっていたジャダヴプール大学がある。父シシルとともにスガタは、スバスが歴史上正当な評価を得るために、時にジャワハルラル・ネルーを中心としたインド政治社会の体制派と一線を画して、インドの国内外において活発に活動してきた。但し後述するように、一部親族の間では、スガタがスバス「復権」に果たした役割は十分でないとの批判も聞こえる。

## 1. 第2次世界大戦後のボース評価

近代的なショッピング・ビルに道を挟んで隣接するネタージ・パワンの門を入ると、ブックストアの隣に多くの写真が展示されており、その中に安倍首相の記念館訪問時の写真も展示されている。コルカタにおける安倍の訪問先は、日本にゆかりのある人物や施設を表敬訪問したものであるが、極東国際軍事裁判（東京裁判）で日本に好意的な姿勢を示し日本の戦犯全員の無罪を主張した故ラダ・ビノード・パル判事の長男プロシャント・パルを訪れ、東京裁判での判事の業績をたたえた後にネタージ・パワンを訪問したことを見ると、この記念館の訪問には、安倍の唱える「戦後レジームからの脱却」を希求する姿が見え隠れする。<sup>2)</sup> 2013年12月の靖国参拝で冷え込んだ中韓との関係によって、このところ「戦後70年に向けての首相談話」を巡っても抑制が求められている安倍であるが、第1次安倍政権期も対中配慮で靖国参拝が難しく、インドにおいてそのはげ口を探った結果が、首相辞任直前に実現したコルカタでのこの2件の訪問であったとも解釈できる。祖父岸信介とともに「親印派」と評される安倍としては自身の価値観を何らかの形で表現した面目躍如のコルカタ訪問であったが、このような文脈での訪問を既にこの世を去ったスバスとパルの2人が評価したかどうかについては、彼等の思想と当時の国際事情を吟味する必要がある。パル判決の評価はさて置き、反英闘争を掲げながらも反ファシズムの立場を鮮明にし、1942年に採択された全インド会議派委員会の「イギリスに対するインド撤退要求決議」の中で、中国やロシア国民の自由防衛のための英雄的行為を高く評

<sup>2)</sup> パルは、戦勝国は戦犯を裁く裁判所を設置することができるが、国際法の立法権を有しないとして、極東軍事裁判所憲章（条例）第5条が犯罪として列挙した諸行為が犯罪を構成するかどうかは、裁判所が独自に決定しなければならないと主張した。そして、東京裁判被告の行為は違法ではなく、被告全員に対し起訴事実すべてにおいて無罪を宣告した。一方、「戦勝国」中国以外では、インドとともにアジアを代表したフィリピンのハラニーリャ判事は、戦時中に日本軍の残虐行為を目撃しフィリピン占領と戦場の現場を知る立場からパル判決に反発し、意見書を提出している。永井均『フィリピンと対日戦犯裁判 1945-1953年』、180-7頁。太平洋戦争末期フィリピンに上陸した米軍に対し日本軍はマニラの城壁都市イントラムロスに立て籠もって激戦が始まるが、市街地に対する米軍の砲撃や日本軍の残虐行為もあって多数の市民が犠牲になった。イントラムロス北西端にあるサンチャゴ要塞には、日本軍の残虐行為を語った小さな碑がある。

価したネルーに見られるように、インドが戦中期の日本を見る目は日本人が考えるほど優しくはない。

日本の支援を受けるスバスの活動を吟味する場合に、東京裁判でのパル判決をどのように評価するかは誤解を生む可能性とともに参考にもなる。特に戦後 45 年 11 月からデリーで開廷となったインド国民軍裁判とパルの関係を見ると、パルのスバスに対する思いを垣間見ることができる。この裁判は、イギリス国王に対する反逆罪でインド国民軍将校の 3 人（ヒンドゥー、ムスリム、シク教徒各 1 人）が裁判にかけられた言わば見せしめ裁判で、デリーのレッドフォート（ラール・キラ）で行われた。外では *Save the INA Patriots* や *Patriots not Traitors* といったパンフレットが掲げられる中、判決は国王に対し戦争を行った罪で終身流刑が言い渡された。<sup>3)</sup> しかし、インド国民軍を愛国者とするインド国民や英印海軍インド人乗組員による反乱で結局判決は施行されず、インド軍総司令官（Commander-in-Chief, India）であったクルード・オーキンレックは刑の執行を停止せざるを得なかった。結果的にこの反乱は、インド独立に向けての大衆運動の大きな引き金となった。当時カルカッタ大学の副学長であったパルは、カルカッタ市内で警官隊とにらみ合う暴動参加の学生たちと衝突の現場に留まったと言われている。パルは、広義のナショナリストであり、ヒンドゥー至上主義の右翼政党全インド・ヒンドゥー大連合（Hindu Mahasabha）の立場に近く、全インド・ムスリム連盟や彼等の唱えるパキスタン分離独立（即ちベンガル人にとってはベンガル分割）に反対の立場を採るとともに、スバスや国民軍に同情的だったと思われる。スバスも兄のサラト同様パキスタン分離独立には反対であったことは、娘アニタ・プファフの証言等でも明らかである。<sup>4)</sup> パルがスバスと違う点はパルが根からの反共主義者であったことであろう。スバスは生きて捕らえられていれば、終戦直後のこの国民軍裁判において訴追されていたはずであるが、パルは、スバスを戦争犯罪人と呼ぶことはできないと考えていたようである。パルにとって日本の A 級戦犯を無罪とする意見書提出は、スバスの名誉保全の役割をも担っていた可能性がある。<sup>5)</sup> ところで、国民軍裁判において英国は、原告側の証拠として在ダブリン英国代表部と BBC に依頼して、それぞれ在アイルランド日本総領事の別府節也を通じてスバスからデ・ヴァレラ大統領に送られた文書と戦争時にスバスが行った放送の摘要を送付してもらっている。<sup>6)</sup>

戦後のインド政治は、ネルーの孫にあたるラジーヴ・ガンディーが 89 年に首相を辞任する

<sup>3)</sup> 実際にはインド刑法（Indian Penal Code）第 6 章 121 項違反であるが、インド刑法には反逆罪に関する規程がないためこの条項が代わって適用された。L.C. Green, 'The Indian National Army Trials', *The Modern Law Review*, vol. 11, no. 1 (Jan. 1948), p. 49.

<sup>4)</sup> 'Partition, India-Pakistan Wars against Netaji's vision: daughter', *Hindustan Times*, Jan. 20, 2013.

<sup>5)</sup> 中里成章『パル判事—インド・ナショナリズムと東京裁判』岩波新書、78-86、231-2 頁。現在政権を担当しているインド人民党（BJP）も、元を迎ればヒンドゥー大連合に行きつく。

<sup>6)</sup> 英国 Public Record Office, DO 35/ 2059.

まで、ネルーとその一族を中心とした国民会議派の政治体制下で展開し、日本に対する戦後賠償請求権を放棄したこともあり、日本人のネルーを中心とした戦後インド政治の「体制派」に対する印象は極めて良好である。即ちインド政治と言えば、長い間我々日本人にはガンディーでありネルーであった。一方、大東亜共栄圏構想の下で日本の協力を得て対英戦を戦ったスバスを知る日本人は比較的少ないし、欧米においても同じような状況である。特に欧米においては、ナチス・ドイツや日本のファシストの援助を得てボースが反英闘争を戦ったことに対する批判から、彼に対する見方は厳しいというよりは殆ど無関心を装う。日本の敗戦直後に対英独立闘争継続のための支援を得ようとす連に渡ろうとし、その途中台湾において飛行機事故で死去したとされるスバスは、杉並区和田の蓮光寺に埋葬され胸像の碑が建立されている。しかし、戦後ネルーや娘のインディラ・ガンディー、ヴァジペーイー等のインド歴代首相が寺を訪れたにもかかわらず、一部右派勢力以外の日本人の間でのスバス人気には繋がっていない。日本に本格インドカレーを伝えたと言われるラース・ビハーリー・ボース (Rash Behari Bose)、通称「中村屋のボース」の方が一般の日本人には知られた存在であろう。また太平洋戦争初期においては、日本の軍部にとっても気心の知れたビハーリーをインド独立運動の旗手に据えた方が好都合であった。戦後日本においてスバスの評価が今一つ上がらなかった理由は、反戦・厭戦気分が支配的で自由と民主主義を称える戦後知識人の間では、東条政権の大東亜共栄圏構想を支えたインド人指導者に対する関心が希薄であったことが挙げられよう。本来インド国内ではスバスはネルー等とともに国民会議派左派或いは急進派指導者として知られるが、例えばナチスの国家社会主義の右翼政治運動にはスバスの提唱する社会主義の目標に類似する点多々見られ、スバスが展開するイデオロギーは右派思想と見なされても仕方がない。戦後日本人の興味の対象が非同盟インドを主導したネルーや彼が指導する国民会議派であったこと、ネルーが戦後サンフランシスコでの対日講和に参加せず独自に日印平和条約を結ぶに至った経緯等日本に好意的態度を示したことで、我が国におけるネルーに対する評価が非常に高まったことは、戦前会議派内でガンディーやネルーの路線と袂を分かった「ファシスト指向」のスバスへの無関心につながったとも言えよう。<sup>7)</sup> 最近でもスバスに対しては、インドのファシスト・リーダーといったレッテルや、半ファシスト (quasi-fascist) の呼称が使用されることがある。<sup>8)</sup> 完全独立を目指した反英武力闘争の流れの中で、ナチスに続いて日本の支援を仰いだスバスにそのようなレッテルを貼り付けることに正当性があるのか精査する必要がある。

ビハーリー、スバス、そしてパルは戦後岸信介を始めとする日本の右派勢力が好んで引き合

<sup>7)</sup> パル判決の問題点、対日講和を巡るインドの態度とその背景については、内藤雅雄『『パール判決』の実像と虚像』『歴史地理教育』2007年1月号、76-81頁に簡潔にまとめられている。

<sup>8)</sup> 例えば、Hugh Purcell, 'Subhas Chandra Bose: The Afterlife of India's Fascist Leader', *History Today*, vol. 60 (11 Nov. 2010).

いに出すインド人であるが、3人とも戦前のベンガル出身者である。ビハーリーの生誕地は今日の西ベンガルにあり、彼は今回の総合研究旅行で訪れたシャンデルナゴルとコルカタの学校を出ている。スバスの出身は今日ではオリッサ州に属するカタック（Cuttack）であり、パルは今日ではバングラデシュ西部に位置する村の出身であるが、3人ともベンガル人と総称できる。戦後日本の右派勢力は、大東亜共栄圏構想の正当化を求めてパルの神話化には成功したかもしれない。<sup>9)</sup> その象徴のように、パルの顕彰碑が靖国神社の遊就館前に建立されている。しかし、逆にパルを絶対平和主義を唱えた熱心なガンディー主義者と捉え、パルの「意見書」の中の日本による中国侵略部分を強調した論考もある。<sup>10)</sup> 確かにパルの「意見書」での主張の中には、東京裁判が戦勝国による事後法を適用した不当な裁判であるとの傾聴に値する論点も含まれるが、パルは日本の対中侵略には共同謀議が認められないとして東京裁判における被告を無罪としており、日本の戦争責任を追及する努力を怠っている。<sup>11)</sup> 「意見書」の満州事変後の中国侵略に関する記述は侵略戦争を否定するものである。1930年代以降、ガンディーやネルーの指導の下で国民会議派が日本の中国侵略を批判する中で、インド社会では日露戦争時の日本礼賛ムードから一転し批判的な意見が中心を占めるようになる。大戦前からインド国民会議派の基本姿勢は、スペイン市民戦争での人民戦線派支持や日中戦争時の「インド国民会議派医療使節団」派遣に見られるように反ファシズムであり、戦時中スバスが活躍したシンガポール等の東南アジアに在住するインド人も、日中戦争時は中国支援の立場を維持した。<sup>12)</sup> このような戦前、戦中の環境の中で、パルがなぜ上記の結論に至り神話化への道を開いたかさらに吟味されるべきである。一方スバスは、日中戦争については日本の政策に否定的見解を抱いていたが、対英米戦が始まると、援蒋ルート閉鎖に象徴されるビルマ作戦にインド国民軍を率いて参加するなど、対英戦の現実の前に日中戦争の情勢など本質的なものではなくなってしまった。しかし日本にとってスバスは、共産主義とファシズムの両方に関心を示すなど思想がやや複雑でスケールも大きく、彼が指導するインド国民軍も日本の支援を受ける一方で日本軍との間に若干の距離を置き、軍部の思惑通りに動く存在ではなかったこと、インド民衆におけるスバスに対する絶大な支持は、日本の右派勢力におけるスバス神話化がパルほど簡単ではないことを示している。

<sup>9)</sup> 中里成章『パル判事』、185-230頁。

<sup>10)</sup> 中島岳志『パル判事—東京裁判批判と絶対平和主義—』白水社、2007年。中里はこの著書の書評で、中島がパルの肯定的紹介に終始し彼の限界や矛盾を批判的に分析する姿勢に欠けるとして、結論は真逆ながらその研究方法は田中正明等の「日本無罪論」のパル論にも通底する側面があると批判する。史的検証に耐えることが出来ず、右派勢力とは別の方向でパル神話が進む可能性を中里は危惧する。『アジア経済』XLIX-8(2008.8)、66-72頁。

<sup>11)</sup> 家永三郎「十五年戦争とパル判決書」『家永三郎集第12巻 評論1 十五年戦争』岩波書店を参照。

<sup>12)</sup> 長崎暢子「東南アジアとインド国民軍—ディアスポラ(離散)・ナショナリズムの崩壊—」『岩波講座 近代日本と植民地 5 膨張する帝国の人流』岩波書店、157頁。

安倍の「戦後レジームからの脱却」の動きと並行して、インドにおけるスバスを巡る再評価の流れも、戦後インド政治のネルー会議派レジームからの歴史的脱却の動きと捉えられなくもない。今回コルカタ滞在中、人種、職業、性別、地位に関係なく民間人に与えられる荣誉としては最高位にあるバーラット・ラトナ賞 (Bharat Ratna) の受賞が 12 月 24 日に発表され、マダン・モーハン・マラヴィヤ (Madan Mohan Malaviya) やインド人民党から 1990 年代後半に首相となったヴァジペーイー (Atal Bihari Vajpayee) が受賞した。マラヴィヤは戦前国民会議派議長を何度か務めたが、その後ヒンドゥー大連合に移ったヒンドゥー・ナショナリストとして知られ、今回の旅行で訪問したバナラシ・ヒンドゥー大学の創立者でもある。両者ともにインド人民党のナレンドラ・モディ現政権下では当然の人選と言えよう。しかし、今回話題に上ったのはこの 2 人の受賞ではなく、結局 1992 年に続いて再度親族が受賞を断ったスバスであった。1954 年に創設されたラトナ賞の最初の受賞者は、インド人でありながら最後のインド総督となったラジャゴバラチャリ (Chakravarti Rajagopalachari) であり、その後ネルー、インディラ・ガンディー、ラジーヴ・ガンディー等が受賞している。既に 8 月の段階でスバスのラトナ賞受賞の噂はあり、それに対してスガタ・ボースは彼の大叔父の偉大さはラトナ賞を超えるものであると発言しているが、ネルー族以外の指導者を認知したいとのインド人民党の思惑がラトナ賞授与提案の背景にあったものと思われる。<sup>13)</sup> 1992 年のラトナ賞受賞候補にスバスの名前が挙がった時には、スバスの一部信奉者の間から、ラトナ賞を超えた存在であるスバスに対するこの賞の授与に批判が集まり、さらに受賞に際して「死後における授与」(to confer the award posthumously) という文言が使われたことに異議が唱えられた。スバスの死を巡る論争は今も続き、戦後の法廷闘争のみならず、例えば 2005 年公開のシャーム・ベネガル監督映画 *Netaji Subhas Chandra Bose: The Forgotten Hero* に対しては、戦前スバスの指導で国民会議派分派として結成され戦後は別政党となった全インド・フォワード・ブロック (All India Forward Bloc) が、公開直前の映画を強く批判し上映阻止に動いている。コルカタを中心に起きたフォワード・ブロックの抗議は、映画の中でスバスが秘密裏にオーストリア人のエミーリエ・シェンクル (Emilie Schenkl) と結婚していたとの描写と、スバスの台湾での飛行機事故死という歴史上確定されていない内容を映画が含んでいる点に対してであった。<sup>14)</sup>

<sup>13)</sup> *The Times of India*, December 27, 2014.

<sup>14)</sup> この映画への抗議については <http://www.theguardian.com/film/2005/may/09/news1> を参照。エミーリエとの結婚については、当時オーストリアはドイツに併合されており、アリア人種以外との結婚は「民族純血法」によって禁じられていたことから、ドイツ政府との無用な摩擦によりインド独立運動に負の影響を与えるのではないかと危惧から公表が控えられたとも言われる。稲垣武『革命家チャンドラ・ボース 祖国解放に燃えた英雄の生涯』光人社 (2013 年 9 月)、115-6 頁。スバスは時折ドイツ語を交えてエミーリエに愛情のこもった手紙を頻りに送っている。Subhas Chandra Bose, *Letters to Emilie Schenkl 1934-42* (Kolkata, 1994) edited by Sisir Kumar Bose & Sugata Bose (Netaji: Collected Works volume 7) を参照。

ラトナ賞の「死後における授与」問題については、カルカッタ高等裁判所で争われることとなったが、一部スバス信奉者は、スバスが台湾での飛行機事故で死亡し生存の可能性はないと結論付けた 1956 年のシャー・ナワズ委員会 (Shah Nawaz Committee) 及び 1970 年のコスラ委員会 (Khosla Commission) で使用された資料に基づいて、スバスの 1945 年 8 月 18 以降の所在を明らかにするように迫った。<sup>15)</sup> スバスが飛行機事故に遭遇せず、そのままソ連に逃れ生き延びているとの噂は、ベンガル州を中心に多くの人々の間で信じられ続けた。そのような状況下、特にベンガル州からの強い圧力もあり、インド政府は 1999 年に、退役インド最高裁判事のムカージー (M. K. Mukherjee) を任命してムカージー委員会 (Mukherjee Commission) を設置し、論争に終止符を打つべく再調査を開始した。ムカージー委員会の結論は、スバスは台北での飛行機事故で死亡したのではなく、蓮光寺にある遺骨もスバスのものであるとの説得力ある証拠がないとするものであった。この調査に当たっては、台湾政府以外からは、インド政府も含め資料の提供等で積極的協力は得られなかったと伝えられている。その意味ではムカージー委員会の結論は様々な疑問に結論を与えていない未完の側面が残る。報告の中で印象的なのは、スバスが大戦後も 1950 年代末までシベリアに拘留されていたとの情報に言及している点である。また 1985 年にウツタル・プラデーシュ州ファイザバードで死亡した僧侶グムナミ・ババをスバスとする見解については、委員会は何の証拠も見出せなかったとしている。報告は当然インド政府にとっては受け入れ難い内容であったが、スバスの死を信じない者達は報告に大いに勇気づけたことは間違いない。以後スバス生存信奉者の運動は、インド政府が保管していると言われる資料の機密指定解除を求める方向へと推移していく。

ところで、スバスの兄サラトにはシシル・クマル・ボースとアミヤ・ボース (Amiya Nath Bose) の他に 4 人の息子がいたが、シシルには前述のスガタ・ボースが、アミヤには、スルヤ・クマル・ボース (Surya Kumar Bose) とチャンドラ・クマル・ボース (Chandra Kumar Bose) の 2 人の息子がいた。実は親族でありながら、スルヤとチャンドラ・クマルはスガタに対して

---

<sup>15)</sup> シャー・ナワズは元インド国民軍第 2 師団長であり、国民軍裁判の 3 人の被告の 1 人であった。この委員会には他にスバスの兄スレシ・チャンドラ・ボース (Suresh Chandra Bose) とアンダマン・ニコバル諸島行政長官の S.N.マイトラの 3 人が委員に任命され報告書を作成した。しかし、スレシは最終報告書への署名を拒否している。稲垣武はスレシとサラトを混同し、サラトが委員の 1 人であるとして、スバス信仰が強くスバスの死を認める雰囲気のないベンガルにおいて、政界の有力者であるサラトがスバスの死を認めることは政治的リスクが大きかったと記しているが、サラトは既に 1950 年に死亡している。一方元パンジャブ高裁長官のコスラ (G.D. Khosla) は、パンジャブ出身でもあり、ベンガル人のボースに対する信奉に関しては一種突き放した見解を持っていた。稲垣武『革命家チャンドラ・ボース』、251-3 頁。ナワズ委員会はインドの他にバンコク、サイゴン、東京で証人と会っているが、台湾を訪れたことはない。Government of India, *Netaji Inquiry Committee Report* (New Delhi, 1956), pp. 69-70. スレシが署名を拒否したことについては、彼には十分な資料の提供がなされなかったこと、スバスの死という結論は既に決まっており、そのような結論の背後にネルーがいたこと等が理由として挙げられている。Leonard A. Gordon, *Brothers against the Raj: A Biography of Indian Nationalists Sarat and Subhas Chandra Bose* (New Delhi, 1997 paperback), pp. 605-6.

批判を強め、スバス関連史料の機密指定解除問題とネタージ・バワンの運営を巡って対立が続いている。スルヤやチャンドラ・クマルは、台湾でのスバスの死に強い疑念を抱き、また同時に1999年に亡くなったニラド・チャウドゥリ (Nirad C. Chaudhuri) が、英国のスパイであったとの主張を掲げている。チャウドゥリは戦前サラトの秘書として働いており、その間サラトやスバス、その他のインド独立運動に関わるインド人が集るネタージ・バワンの様子を逐一英国側に伝えていたとされる。チャウドゥリに関する文書の公開をインド政府が拒否していることも、スルヤ側の不満を高めている。彼らは、サラトが1941年に英国当局によって逮捕された背景には、チャウドゥリによる英国側への情報提供があったと判断しているし、さらにはやや奇想天外ではあるが、チャウドゥリの諜報活動が機密資料の公開によって明らかになることで、スバスの死或いは失踪を巡る疑念も晴れると信じている。アミヤやスルヤ、そしてチャンドラ・クマル等は、中央捜査局 (Central Bureau of Investigation) に対してスバスやチャウドゥリに関するファイルの機密指定解除を求め続けている。スガタの母でありシシル・ボースの妻であるクリシュナは、スルヤやチャンドラ・クマル等とは距離を置き、基本的にスバスが台湾での飛行機事故で死亡したとの説を受け入れている。クリシュナがニラド・チャウドゥリの姪であることも、チャンドラ・クマルが彼女やスガタに対して疑念を増幅させている理由かも知れない。ところで、スバスの妻シェンクルは当初飛行機事故死説を信じなかったが、2人の娘であるアニタは、生存者の証言を聞いて以降は事故死説を受け入れ、シシル・ボース側に近い立場を維持している。<sup>16)</sup> チャンドラ・クマルは、スガタのファイルの機密指定解除に関する態度に原則がなく、ネタージ・リサーチ・ビューローを主導する働きも満足なものではないと批判する。またスガタに反対する親族は、スガタが国会議員選挙運動において、スバスの他にサラトやアミヤにも言及し、さらにはスバスの戦時中の対英戦のスローガンであった「チェロ・デリー」(Chalo Delhi、進めデリーへ) を、デリーにおいて政治権力をつかみ取る意味でスガタが使用しているとして抗議の声を上げている。<sup>17)</sup> ところで、スルヤは2013年11月6日に東京憲政記念館で開催された大東亜会議70周年記念大会に参加し渡部昇一等とともに講演を行っているが、このようにスルヤ陣営は日本の右派勢力と結びつく傾向がある。スルヤにとっては記念大会への参加は、叔父であるスバスの想いを自ら体現する行為であったことであろう。

このような批判運動や資料の機密指定解除運動の中心となったのは、一部親族とミッション・ネタージ (Mission Netaji) と呼ばれる組織、さらにはフォワード・ブロックであった。ミッション・ネタージの創設者アヌジ・ダール (Anuj Dhar) は、自身の著書で強力にスバス

---

<sup>16)</sup> 'So, Thy Hand?', *Outlook*, April 8, 2013.

<sup>17)</sup> 'Bose family opposed Sugata Bose', *The Times of India*, April 7, 2014.



生存説を展開する。<sup>18)</sup>そして彼等の運動はインド・ナショナリズムの保守派の動きと結びついていくのである。戦後インド人民の間でスバスの人気は各所で認められるが、特にコルカタを中心とした西ベンガルでの人気の高さは絶大である。このように戦後においても日印両国での存在と活躍が注目を集めてきたスバスの経歴を追い、彼の業績を再考してみたい。

## 2. インド独立への目覚め

スバスは、1897年1月23日にオリッサ州カタックでジャナキ・ナース・ボース (Janaki Nath Bose) の14人の子供の中で9番目の子供、6番目の息子として生まれる。<sup>19)</sup>カタックは当時人口2万人程であったが、オリッサ州の州都であり宗教と芸術の中心でもあった。この頃既にジャナキは、カタックにおいて名の知られた弁護士でありソーシャル・ワーカーであった。1912年にはベンガル州議会のメンバーとなり、特に政治的活動に関与したわけではないが、国民会議派の大会には定期的に出席していた。彼は慈善家であったが子供達には厳しく接したようである。大家族でもありスバスと過ごす時間は極めて短かった。スバスの母ブラバヴァティは、ボース家の家事一般を仕切り強い意志をもった女性であったが、慈愛に溢れ宗教に対する理解も持っていた。後述するスバスの宗教心は母の影響であった可能性も高い。大家族の中で育ったスバスは、先祖の村の遠い親戚も含めた家族を大きなサークルと考え自己中心的な態度とは無縁であった。ボース家は、強いて言えば裕福な中流家庭であった。スバスは5歳でヨーロッパ人やアングロ・インディアンの子弟のために創立されたミッション系の学校に入学するが、カリキュラムは勉学よりも躰に重きが置かれ、学習内容もインドに関する事柄よりは英国の地理や歴史が中心を占めた。スバスはこの学校に満足できず、12歳で同じカタックの Ravenshaw Collegiate School に入学する。彼はそこで出会った校長のベニ・マダーヴ・ダース (Beni Madhav Das) に霊的な刺激を始め大きな影響を受け、彼を生涯の師と仰ぐようになる。そして、15歳になった頃に人生の理想としてスワミ・ヴィヴェーカーナンダ (Swami Vivekananda) の教えに傾倒し、瞑想に耽りヨガに没頭するようになる。ガリバルディやレーニン等自由の闘士の伝記を熟読したのもこの頃で、国を愛し外国支配から母国を解放することの崇高さに目覚めた時期でもあった。

読書や社会活動等に熱中しながらもスバスは優秀な成績を収め、父はスバスをカルカッタ大学の名門カレッジであるプレジデンシー・カレッジに送ることを決める。スバスにとってはカ

---

<sup>18)</sup> Anuj Dhar, *India's Biggest Cover-up* (New Delhi, 2012).

<sup>19)</sup> スバスの生い立ちや活躍については、主に Edmund Muller & Arun Bhattacharjee, *Subhas Chandra Bose and Indian Freedom Struggle* (New Delhi, 1985) 及び Sugata Bose, *His Majesty's Opponent* を参考にした。



嘗てのプレジデンシー・カレッジ正門。現在はプレジデンシー・ユニヴァーシティと呼ばれる

レッジでの学びは退屈そのものであったが、社会活動や宗教には興味を抱くようになる。17歳の時スバスは真理を求めてバラナシやブダガヤに巡礼の旅に出ている。カルカッタに帰着後スバスは勉学に励むが、教師と学生の対立を切っ掛けに学級代表でもあったスバスは、責任の一端を負わされ退学処分となる。スバスはプレジデンシー・カレッジ以外のカレッジに入学できるようにカルカッタ大学に嘆願するが受け入れられず、結局カタックに戻って社会活動に没頭する。カタックでは、オリッサ州に多かったコレラや天然痘患者に対するボランディア看護団を組織し、不可触民をも含めて患者の看護に当たった。2年後スバスにカルカッタ大学への復帰の道が開かれ、今度はスコティッシュ・チャーチ・カレッジへの入学を果たしている。今回はスバスも勉学に没頭したが、この頃大学内では、フォート・ウィリアムのリンカーン連隊から派遣された教官による軍事訓練が行われていた。スバスは訓練に熱心に取り組み、この経験は東南アジアにおける将来のインド国民軍を指揮する上で大きな助けとなったと考えられる。それよりもこの時期のスバスにとって、軍服に身を固め普段はインド人の立ち入ることのできないフォート・ウィリアムに訓練兵として入場でき、本来インド人には認められていない権限を享受できたことは無類の喜びであった。しかし、これらの権利の享受は、本来植民地政府が提供する軍服を着用することによって認められていたわけである。<sup>20)</sup>

スバスはさらなる高等教育機関での勉学の道に興味を抱いていたが、彼の父はスバスをケンブリッジ大学に送り、インド高等文官 *Indian Civil Service* の試験を受けさせようとする。ケンブリッジにおいてスバスは、常に官憲の圧力を受けるカルカッタの大学と違い、大学の自由

<sup>20)</sup> Rudrangshu Mukherjee, *Nehru & Bose Parallel Lives* (Gurgaon, 2014), pp. 10-11.

な雰囲気を楽しむ、そのような自由のためには植民地支配からの独立の必要性を強く意識するようになる。1920年7月に受けたインド高等文官試験に4番の成績で合格を果たすと、スバスはこのまま高等文官の道、即ちイギリス植民地統治を支える道に入ることを選ぶか、本来自分が目指すべき道である母国インドに仕える方法を選ぶか自問の毎日が続くことになる。その間スバスは、デスハバンドゥ・チッタランジャン・ダース (Deshabandhu Chittaranjan Das) や兄サラトに相談を持ちかけるが、7ヶ月後ついにインド高等文官を辞退する決断をする。このような決断が示唆するように、スバスのケンブリッジ留学は、彼を一人の大人として大きく成長されたと言えよう。スバスとネルーの人生には多くの類似点があるが、留学期間中のインドに対する思いと人生の意味に対する真摯な取り組みの点に関しては、スバスに軍配が上だろう。最近出版されたムカージーの *Nehru & Bose: Parallel Lives* においても、2人の人生の行程の中で多くの類似点と相違点が指摘されている。Parallel Lives とは2人の関係を表す絶妙な副題である。2人は年齢差にも拘らず似たような人生を歩み、時に友人として近づき、また時には政策や方法論の違いから政敵として離れていく。

スバスが英国から急遽インドに戻った1921年は、英国のインド統治において激動の年であり曲がり角でもあった。19年にテロ容疑者に対する令状なしの逮捕と裁判抜きでの投獄を認めたローレット法が成立し、この悪法に抗議してアムリトサルジャリヤーンワーラー・バーグで起こった集会に対して、レジナルド・ダイヤー准将率いるグルカ兵からなる小隊が集った群衆に対して弾丸が尽きるまで発砲する事件が発生した。所謂アムリトサル事件である。事件後戒厳令が施行され騒動は一旦収束したかに見えたが、この事件が英国のインド統治の終焉の始まりと見る向きもある。事件がスバスに与えた衝撃は非常に大きなものがあり、インド帰国を果たすやスバスは、ガンディーが掲げる非暴力・不服従運動であるサティヤグラハ運動、即ち非協力運動に深く関与していく。帰国時にボンベイでガンディーと面会したスバスは、ガンディーからインド独立に向けての明確な方策を引き出すことができず落胆するが、その直後カルカッタでダースと出会い、彼の独立に向けての明確な戦略と気概に感銘を受けたようである。ネルーがこの頃ガンディーに抱いた一種の畏敬の念と比較すると、この時期から2人のガンディーとの距離感の違いが現実のものとなりかけていた<sup>21)</sup> スバスの献身的態度と優れた組織能力によって、彼は直ぐに全国的にその存在が知られるようになる。21年末に英国皇太子(後のエドワード8世)のカルカッタ訪問が計画されると、国民会議派は訪問の全面ボイコットを決め、11月にはハルタル(Hartal、同盟休業)が宣言され、スバスも会議派ベンガル支部の広報担当としてハルタルのカルカッタ及びベンガル全域での実行に責任を持つこととなる。スバスの活躍もありハルタルは大きな成功を収め、そのためスバスもチッタランジャン・ダースと

---

<sup>21)</sup> Ibid., pp. 32-3.

ともに投獄される。スバスがダースの右腕として活躍し始めた頃から、スバスの兄サラトが家主を務めるネタージ・バワンは、ダース等が集る集会の場となった。22年に釈放されると、ダースは国政における新しい反政府運動を手がける。ちょうど同年2月に、警察の挑発に乗った村人達が22名の警察官を焼き殺すというチャウリ・チャウラ事件が起き、ガンディーが急遽非協力・不服従運動を中止した頃である。その年の12月にガヤで開催された国民会議派大会でダースは大会議長に選出される。ガンディーの不服従運動中止の決断によって運動の停滞を恐れたダースであったが、大会期間中会議派のガンディー支持勢力の数に勝てず、彼はジャワハルラル・ネルーの父モティラル・ネルー等とともに、英国支配に対してインド人民の自治と政治的自由を求めるスワラジ党を立ち上げる。スバスもダースの活動にぴったりと寄り添って、運動の継続を強く推進していった。翌23年スワラジ党は英文日刊紙 *Forward* を創刊するが、この党機関紙の刊行に責任を持ったのもスバスである。続いてダースがカルカッタ市長に選出されると、スバスも市政の最高執行責任者として活躍し政治経験を積みながら優れた行政官としての力を発揮したのである。このようなスバスの活躍を英国が見逃すはずはなく、スバスは24年10月に逮捕され、暫くしてかつてスワデーシー運動で中心的役割を果たしたララ・ラジパット・ライ (Lala Lajpat Rai) やバル・ガンガダル・ティラク (Bal Gangadhar Tilak) 等の指導者も投獄されたビルマのマンダレーに送られることとなる。

この頃英国のインド統治の諜報機関であるインド政治情報局 (Indian Political Intelligence) も、スバスの活動に警戒感を強めていた。政治情報局文書には、22年にマナベンドラ・ロイ (Manabendra Nath Roy) を始めとする海外在住の共産主義者とボースの間に接触があったことが指摘されている。ロイは20年にインド共産党を創設しコミンテルンでも活躍したが、30年にインドに戻った翌年逮捕されている。その間ロイはネルーやスバスと会合を持っているが、ロイの武装闘争も辞さない急進主義は、抑圧され搾取されている人民には支配層の道徳を遵守する義務はないとの考えに基づく。ガンディーの非暴力主義と一線を画するこのような考え方は、一部ダースにも通じるところがあり、またスバスがこのようなロイの考え方に感化された可能性も否定できない。但し、確かにこの時期のスバスには共産主義への傾斜が見てとれるが、スバスと共産主義との関係はインド政治情報局によって過度に強調されている面があり、そのことは英国諜報機関にとって共産主義の脅威が当時最も大きな関心事であったことを物語っている。スバスは、ヨーロッパの指導者達にインドにおける悲惨な現状を訴えた著書『闘へるインド』 (*The Indian Struggle, 1920-1934*) の中で、共産主義とファシズムの融合を実現させることがインドに与えられた役割であると書いている。このことは、インドの独立という崇高な目的のためには、これら2つのイデオロギーとの協力をさえ模索したスバスの戦術眼があったことを示唆している。

マンダレーでの獄中生活で体調を崩したスバスは 25 年 6 月に釈放されるが、同じ頃彼が師と仰ぐダースの死に直面する。獄から出たスバスが見たのは、非協力運動の悲惨な現状であった。彼はネルー等とともに、急速な反英運動の展開に躊躇するガンディーや会議派首脳部を向こうにまわして運動に息吹を吹き込もうとする。ネルーとスバスの同志としての関係が一番深まった時期でもあった。29 年から 30 年に掛けてラホールで開催された会議派大会は、ネルーが議長を務める中で、英国支配からの完全な独立 (Purna Swaraj) を宣言する。もちろん独立の実現までにはその後 17 年の時の経緯が必要であったが、それを切っ掛けに全国規模の不服従運動へと発展して行く。ガンディーによる塩の行進 (salt satyagraha) が実行されたのもこの時である。その後ガンディーはロンドン円卓会議に出席するが、インドに自治領 (dominion status) の地位を与えるかどうかについても妥結に至らず、帰国後間もなく逮捕の身となってしまう。スバスも 32 年 1 月に再度投獄されるが、監獄における厳しい生活で体調を壊し、今回はヨーロッパでの治療・療養の許可が出される。インド政治情報局の調べでは、33 年頃のスバスはガンディーの非暴力運動に対しては懐疑的であり、流血を伴わない独立の達成は不可能であるとの見解に達していた模様である。ガンディーは 30 年代を通じて、会議派もインド人民も大衆運動に対する準備が不十分であるとして、植民地政府に対する非協力、不服従運動からほぼ撤退していた。会議派の中でガンディーの取り巻きは、まるで密室政治のように、ガンディーの権威に挑戦できそうな若き会議派リーダー達を遠ざけ、大胆な変革の芽を摘もうとした。結局、ネルーはガンディーに折れてガンディーの後継者の立場の基礎を確固たるものとするが、スバスは反発し、ガンディーを尊敬しつつも彼の影響下に完全に入ることを躊躇する。<sup>22)</sup> 42 年 3 月、チャーチル主導の英国戦時連立内閣から派遣された労働党の左派政治家スタフォード・クリップス (Stafford Cripps、所謂クリップス・ミッション) は、戦後インドの自治を保障する条件で (所謂ドミニオン・ステイタス) 戦争への全面協力を求めたが、即時自治を要求するガンディー指導の会議派やムハンマド・ジンナーのイスラム連盟に受け入れられず、同年 8 月に市民的不服従運動であるクイット・インディア運動が始まる。スバスとガンディーの距離が縮まるには、そこまで待たねばならなかった。<sup>23)</sup>

ところでヨーロッパでの治療は、当時最高水準の医療を受けられるメリットの他に、ヨーロッパのリベラル勢力や人物との交流の機会が期待された。ウィーンに着いたスバスは、同じく

<sup>22)</sup> Ibid., pp. xii-xiii. 後日スバスは日本においても、インド独立或いは東亜の解放は武力のみによってなし得るものであり、その点においてガンディーと自分は意見を異にすると明言している。「印度独立を宣明して日本国民諸君に訴ふ」『日印協会会報』86 号 (1944 年 5 月)、37 頁。

<sup>23)</sup> Sisir Kumar Bose, *Netaji Subhas Chandra Bose* (New Delhi, 2001), pp. 120-1. スバスは 42 年 12 月 7 日のベルリンからの放送で、妥協のないチャーチルよりリベラルで民主主義者のクリップスの路線の方が、インドのナショナリストに混乱を与える故に独立にとっては大きな脅威であると訴えている。Sisir K Bose and Sugata Bose, eds., *Azad Hind: Writings and Speeches 1941-1943* (London, 2004), p. 166.

ウィーンに療養に来ていたヴィタルバーイ・パテール (Vithalbhai Patel) に会っている。パテールはスワラジ党設立にも関わり、塩の行進終了後会議派を離党して反ガンディーの立場を鮮明にした活動家である。スバスとは同じような考えを持ち、2人は意気投合して資金や支持を集めるためにヨーロッパ中を旅している。ところで、パテールが創設に関与したインド・アイルランド独立連盟は、パテールの3度目のダブリン訪問時に創設された。パテールは4度にわたってアイルランドを訪問しており、これらの訪問はインド・ナショナリストの反植民地闘争で重要な意味を持っている。<sup>24)</sup> 英国によって急進左派のレッテルを貼られたパテールは、27年のダブリン訪問時にはデ・ヴァレラの前任者で22年から32年まで首相としてアイルランド自由国 (An Saorstat) を率いたコスグレーブ (W.T. Cosgrave) に会っているが、彼の最大の功績は、後述するメアリー・モーリー・ウッズ (Mary Mollie Woods) との関係も深いモウド・ゴン・マクブライド (Maud Gonne MacBride) 等とともに実現させたインド・アイルランド独立連盟の設立である。

一方スバスも、ガンディーの非暴力運動のような流血を伴わない手段を通じての独立達成は不可能であるとの見解に達していたようで、ゲリラ戦によって反英闘争を展開したアイルランドが採った戦術に関心を示し始めていた。33年から3年間の滞欧中に、スバスは治療の傍らヨーロッパ各国を訪問し多くの指導者と面会してきたが、36年のダブリン訪問は最も成果を上げた交流であったと言える。療養中であったパテールは1933年にジュネーヴで死去するが、スバスは死の直前のパテールにしばしば会い、モーリー・ウッズからのパテール宛の手紙に対しパテールに代わって返事を書いている。こうしてウッズとスバスは書簡のやり取りをしばしば行い徐々に関係を深めていくが、スバスのアイルランド訪問に際して彼の旅程作成等最も力強い協力者となったのはウッズであった。インド政治情報局も、スバスが滞欧中にヨーロッパの指導者にしばしば面会し彼の主張が注目を集めるようになると、徐々にスバスに対する監視を強化するようになる。<sup>25)</sup> このように警戒を強める英国政府に対し、スバスによって訪問許可申請を受けたアイルランド自由国政府は、慎重に申請への対応を行っている。

### 3. スバスのアイルランド訪問

スバスのアイルランド自由国への訪問申請は既に33年半ばになされているが、訪問が実現したのは、36年1月31日にスバスがアイルランド南部の港町コーヴに到着した時である。ス

---

<sup>24)</sup> パテールの弟は初代首相ネルーの下で副首相や内務大臣を務めたサルダール・ヴァッラブパーイー・パテール (Sardar Vallabhbhai Patel) である。

<sup>25)</sup> O'Malley, *Ireland, India and Empire*, pp. 91-100.

パスの訪問手続きについては、ベルリンにあるアイルランド公使館からダブリンの外務省に対してスパスへのビザの発給を行ってよいかの問い合わせがあり、外務省がスパスの自由国上陸に法的問題が存在しないかどうかを法務省に照会した 33 年 8 月に始まった。<sup>26)</sup> 8 月 21 日に外務省から法務省に出された書簡から判断すると、外務省としては、スパスが保持していたパスポートには英国とドイツへの上陸が禁止されており、自由国への入国にも特別な承認が、この場合インド政庁から与えられる必要があるのではないかとの疑問が過ったものと思われる。しかし、スパスは既にドイツを含め他の多くの欧州諸国への入国許可をウィーンの英国領事館から得ていた。スパスがドイツ入国許可を得た経緯は、自由国法務省が 35 年 4 月 16 日に受領した英国内務省からの通知によると、33 年 5 月にシュヴァルツヴァルトのサナトリウムでの療養の必要が申請された時にスパスに対してドイツ入国が認められたということである。<sup>27)</sup> 結局アイルランド外務省としてはスパスの自由国への直接の入国については問題ないとし、但し英国にとって「好ましくない人物」(persona non grata) であるスパスの自由国から英国への上陸は認められない旨スパスの入国時に明確に伝えることで上陸許可を与えたいと考えていた。自由国上陸の日時と場所をスパスが事前に連絡することを義務付けることで、当該地の入国係官に適切な対応を指示することができるとの判断であった。このような条件でスパスの入国を認めることの是非を法務省にも確認したかったのである。実は外務省による法務省への問い合わせの 3 日程前に、デ・ヴァレラはこの問題を彼の法律・外交問題顧問のジョン・ハーンと相談し、法務省が問題なしとすれば、スパスの自由国への入国を認めるよう指示している。<sup>28)</sup> 実際にスパスが自由国に入国しようとしたのはその 2 年半後であるが、その直前には、アイルランド外務省、法務省、アイルランド警察 (Garda Síochána, the guardian of the peace の意) に加えて、英国政府当局もスパスの動向に関心を寄せており、彼の旅程は逐一監視されていた。この期間アイルランド政府当局が使ったスパスの肩書はカルカッタ市長或いは前カルカッタ市長であったが、ダブリン警察当局は British Indian Extremist との呼称も使用している。<sup>29)</sup> スパスのパスポートへのアイルランド入国査証は、駐ベルリン特命全権公使のチャールズ・

<sup>26)</sup> National Archives of Ireland (NAI), JUS 8/443.

<sup>27)</sup> Ibid.

<sup>28)</sup> University College Dublin Archives (UCDA), P150/2303. Memoranda by John J. Hearne on 'Subjects discussed with President' at regular meetings between 27 June and 18 August 1933 and between 1 March and 28 May 1934. この覚書は UCDA 所蔵の Eamon de Valera Papers の一部である。

<sup>29)</sup> NAI, JUS 8/443. この報告書はダブリン城にあるダブリン警察 (Garda Síochána, Metropolitan Division, Special Branch) から 36 年 2 月 14 日に提出されたものである。

ビューリー (Charles Bewley) によって準備されたが、34年4月9日付ビューリーのアイルランド外相ジョセフ・ウォルシ宛報告は、スバスとの会話の内容を簡潔に伝えている。ビューリーは30年代にナチスの手から逃れアイルランド自由国に渡ろうとしたユダヤ人に対する査証の発行に反対し、結果としてユダヤ人の強制収容所送りを間接的に幫助した人物とされる。ビューリーによると、会話の中でスバスは、ドイツの指導者は同じゲルマン人の系譜を引くイングランド最良であり、他方インドに対しては敵対的で、最近の事例としてヘルマン・ゲーリング元帥がガンディー等の受け入れ拒否を貫き、ヒトラーの著書ではインド独立に反対の立場が表明されていることにも触れている。さらに、『20世紀の神話』の著者でありナチスの人種論やユダヤ人迫害等のナチス信条を作り上げた人物の1人であったアルフレッド・ローゼンベルクとの会話でも、同じような見解がスバスに対して示されたこととビューリーは報告書に記載している。またスバスがドイツ外務省のハンス・ディークホーフ (Hans Heinrich Dieckhoff) を訪問した際も、ナチスにとっての権益は英国のそれと密接に結びついており、インド独立に対する関心は皆無に近いとの印象をスバスが持ったと報告されている。<sup>30)</sup> 一般ドイツ人はともかくも、ドイツ指導層は基本的に英国との友好を優先しているとスバスは分析している。また、スバスが、ガンディーの受動的抵抗は過去のものであると主張していることにもこの報告は触れている。<sup>31)</sup> このようなアイルランド外務省関連の文書を見ると、スバスがナチスに見切りを付けた背景には、41年6月の独ソ開戦や12月以降のアジアにおける戦況の急展開以前に、インド独立に対してドイツ側が極めて消極的的支持しか示さなかったことがあったと言えよう。そのような消極姿勢の背景に、戦略的というよりは人種論から導き出された英国との連携姿勢があったことが理解できる。確かにこの時期は、ナチスの政策判断が人種論によって大きく左右されていた頃であった。しかし、41年以降のアジア戦況の展開の中で、日本側の南方戦略の混乱もあって、アジアへの移動を希望するスバスを日本が直ぐに受け入れることはなかった。

36年1月27日、ベルリンからパリに入ったスバスは、ルアーブルに発つ前に駐パリ自由国代表部のアート・オブライエン (Art O'Brien) と会っている。スバスはかなりの時間をオブライエンとの会話に費やし、アイルランドの現状や各種政党等について質問を浴びせたようである。さらにスバスは、国際連盟においてインド問題を提議する是非について質問したが、オブ

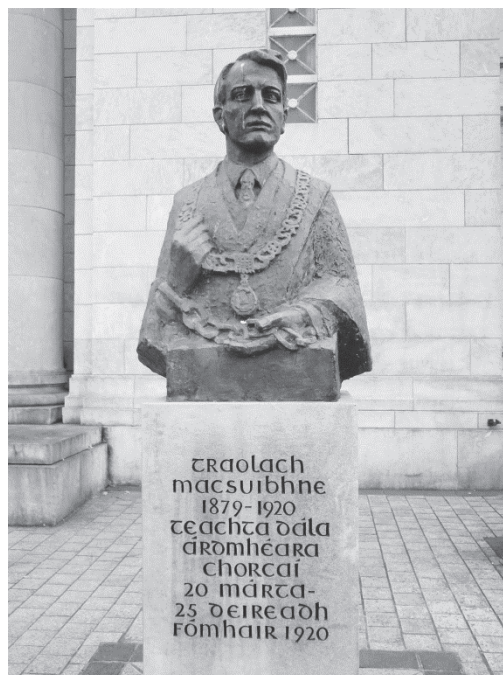
---

<sup>30)</sup> NAI, DFA 19/50A. Berlin Legation Confidential Reports 1935, 1936 part 1 of 4. 同じ文書が、'Extract from a confidential report from Charles Bewley to Joseph P. Walshe' (Berlin, 22 January, 1936), in Ronan Fanning, et al., eds, *Documents on Irish Foreign Policy* (Dublin, 2004), vol. iv, 1932-1936, p. 410 に掲載されている。ディークホーフは、第2次世界大戦前の最後の駐米大使で、リッベントロップ外相とは縁戚関係にあった。ところで、対英関係を基礎としたナチスの外交政策はアイルランドとの関係にも影を落とし、ビューリーによると、ローゼンベルクが編集長を務めたナチスの機関紙 *Völkischer Beobachter* の記者はビューリーとの会話の中で、ナチスの英国との同盟関係をアイルランドのために危険にさらすことはできないと明言したとのことである。NAI, DFA 19/50 Part two of two.

<sup>31)</sup> Ibid.



ライエンは、そのような問題は大統領との会談時に直接聞かれたらどうかと答えたとのことである。オブライエンは 19 年から 22 年までシン・フェインのロンドン代表を務めた共和派左派活動家で英愛条約に強く反対していた。<sup>32)</sup>ところで、デ・ヴァレラとの会談の実現に関しては、モーリー・ウッズの果たした役割は非常に大きかった。<sup>33)</sup>フランスのルアーブルから米国船「ワシントン」でコークに着いたスバスは、翌日ダブリンに向けて鉄道で出立するが、その前にメアリー・マックスウィニーに面会している。メアリーの弟テレンス・マックスウィニーは反英闘争の英雄で、アイルランド第 2 の都市コーク市の市長に選出された後、英国のブリクストン監獄に収監される。監



コーク市庁舎前のテレンス・マックスウィニーの胸像

獄内での彼のハンストは世界中の注目を集め各国から英国政府に対する抗議の声が上がったが、彼は監獄内で死亡し、その後コークに移送され埋葬された。テレンスが獄死した 1920 年、後にシンガポール陥落時に英軍司令官として日本軍の山下奉文に降伏するパーシバル (Arthur Percival) が、このコークにおいて I.R.A. 弾圧の指揮をとっており、Black and Tans を超える残虐行為によってアイルランド共和主義者の憎悪を一身に集めていた。テレンスの活動はアイルランドのみならずインドでも注目を集め、今日コーク市役所前には彼の胸像が設置されている。メアリーもテレンスの死後、コーク市からシン・フェインの候補者としてアイルランド下院 (ドイル・エアラン) 選挙に立候補し当選している。彼女はその後も急進共和主義路線を踏襲し、一時デ・ヴァレラ辞任後のシン・フェインの事実上の指導者となっている。現在ダブリンのユニヴァーシティ・カレッジ文書館にはメアリー・マックスウィニー文書が保管されているが、その中にメアリーとオブライエン及び同じくシン・フェインの議員で英愛条約に反対したアート・オコーナー (Art O'Connor) との通信記録がある。メアリーとオブライエンの関係

<sup>32)</sup> 英紙 *Daily Express* はスバスのアイルランド訪問を *Indian Agitator for I.F.S. Banned Leader in Search of Sanctuary* と題して 36 年 1 月 16 日付で紹介する中で、オブライエンを「ロンドンにおけるシン・フェインの元リーダー」と表記している。オブライエンは 16 年から 23 年まで *President of the Sinn Féin Council of Great Britain* の肩書を持っていた。

<sup>33)</sup> NAI, DFA P.2/56.

を見ると、スバスのアイルランド訪問に関しても2人の間に何らかの連絡や打ち合わせがあったと推察できる。<sup>34)</sup>

ところで、コーヴから2月2日にダブリンに到着したスバスは、翌日デ・ヴァレラやダブリン市長との会談に臨んだが、スバスを始めインド・ナショナリスト達はデ・ヴァレラが深く関わったアイルランド独立闘争に対し深い尊敬の念を抱いていた。その日の夜スバスは、モウド・ゴン・マクブライドが会長を務めるインド・アイルランド独立連盟のレセプションに招かれている。マクブライドがスバスのインド独立に向けての運動に言及し、故パテールのアイルランド訪問に言及すると、スバスはスピーチに立ちインドの状況を説明するとともに、過去40年間のアイルランドでの運動がインド人にとっては大きな関心事であったと述べ、入国を認めてくれた自由国政府に感謝している。<sup>35)</sup>5日には下院ドイル・エアランでの審議を見学し、その後フランク・エイケン国防相やジョセフ・ウォルシ外相等の政府関係者に会っている。9日、「女性服役政治犯擁護のための連盟」(Women Prisoners' Defence League)の集會にスバスは出席する。この組織は、内戦が始まった頃に共和主義者の政治犯やその家族を支援する目的で創設されたものであるが、マクブライドの他にハンナ・スケッフイントン(Hanna Sheehy Skeffington)やシャーロット・デスパード(Charlotte Despard)等の婦人参政権論者が深く運動に関与していた。また彼女達は故パテールとも交流を持っていたので、スバスが彼女達の主催する集會に出席するのは自然な流れであったと言えよう。アイルランド警察の報告では、集會でのスバスの発言は反帝国主義的であるが、自由国政府に対しては非常に友好的であった。スバスの紹介に当たってマクブライドは、英国がスバスの上陸を阻止する理由は今日インドが置かれている状況についてスバスが直接英国国民に語りかけることを回避したいためであること、スバスを支持するロンドン在住インド人グループから多くの電報が届いていること等に言及した。最後にスピーチに立ったドイルは南アイルランドの労働者が置かれた状況に触れ、現政府が設立した多くの小規模工場では女性が搾取され、インドの状況に類似すると主張している。スバスにとってこの集會で語られたことは、自身の考えや心情に比較的近いものがあったと思われるが、この連盟自体の主張がややもすると反英帝国主義のみならず反現政権に傾斜することもあり、デ・ヴァレラ首相との会談を終えたスバスの立ち位置は難しいものであったと想像できる。<sup>36)</sup>

33年10月にマクブライドとデ・ヴァレラの間で交わされた書簡から判断すると、この連盟の集會にスバスが出席することは、デ・ヴァレラには若干納得いかないものがあつたかも知れ

<sup>34)</sup> UCDA, Mary MacSwiney Papers, P48a/367.

<sup>35)</sup> NAI, JUS 8/443. (36年2月4日付 *Irish Times* 掲載の記事 'India's Attitude to Freedom'から)

<sup>36)</sup> スケッフイントンやデスパードとパテールの関係については、拙稿「インド・アイルランド関係と大英帝国」『専修大学社会科学研究所月報』no. 614, 12-14頁を参照されたい。

ない。ダブリンでのスバスの予定の最初にデ・ヴァレラ大統領との会談の設定を求めた大統領府には、スバスに対してのみならず、スバスの周りに集まる共和派左派の面々への牽制の意味合いがあったのではないかと推察できる。マクブライドは「女性服役政治犯擁護のための連盟」の事務局長の肩書を持ち、デ・ヴァレラと交わされた書簡でもこの連盟のレターヘッドがあるものを使用しているが、彼女はその中で共和主義者の服役政治犯（即ち I.R.A. 戦士）が獄中で不当な扱いを受けていることに抗議し、ダブリン市内のアーバーヒル監獄の劣悪な環境にも言及している。マクブライドの 10 月 3 日付書簡では、先の選挙で彼女がシン・フェインの影響力に抗して I.R.A. 票の獲得のために奮闘し、その結果デ・ヴァレラによって設立された政党フィアナ・フォイル (Fianna Fáil、共和党) の勝利に大きく貢献したことに言及してから、共和主義者政治犯の待遇改善の要求や英国製品不買運動の提案を並べている。アイルランドのみならず、インドにおいてもそのまま通用しそうな要求である。デ・ヴァレラのフィアナ・フォイルは共和派左派シン・フェインと袂を分かって設立された政党であり、マクブライドとデ・ヴァレラは共和派の中でも政治的立場を異とするが旧知の間柄である。このようなマクブライドの要求に対してデ・ヴァレラは、正面からマクブライドの主張を論駁している。<sup>37)</sup> デ・ヴァレラ書簡の論調は、国家の法と秩序を守り更なる内戦を回避するためには、共和主義者にも政府を信頼し自制が必要であること、英国製品の不買運動は報復措置で逆にアイルランド経済にとってマイナスであること等を列挙している。国が無秩序に陥れば、イタリアのファシズムやドイツのナチスの台頭を招いた事態がアイルランドでも起きかねないとの懸念をデ・ヴァレラは訴える。政権を維持するようになったデ・ヴァレラには、この頃独立闘争の闘士から現実政治家への変遷が徐々に見られる。後述するように 43 年にスバスを指導者として自由インド仮政府 (Azad Hind) 樹立がシンガポールで宣言されるが、日本の金銭的、軍事的支援を約束された仮政府も、デ・ヴァレラのアイルランド自由国政府によっては「現実政治的配慮」から正式承認を得ることは出来なかった。デ・ヴァレラは 44 年 2 月のアイルランド下院での答弁で、「中立国の慣習として、その存続が戦争の推移に影響を与えるような新しい国家や政権に対しては、戦争状態が継続する間は承認を行わない。」と答弁している。現実志向の政治家に転向したデ・ヴァレラは、戦後ネルーとの関係が最も良かったと思われる。事実、インド人の中でデ・ヴァレラと最も親しく交流を保ったのは、ネルーとサラト・ボースであった。<sup>38)</sup> デ・ヴァレラの論駁に対してマクブライドも負けておらず、10 月 20 日付返信の中で、彼女とデ・ヴァレラの間には楔を打ち込もうとするのが英国諜報機関の狙いであるとの見解を示す。<sup>39)</sup> 共和主義者の中が

---

<sup>37)</sup> UCDA P150/2259.

<sup>38)</sup> 拙稿「インド・アイルランド関係と大英帝国」20、27-30 頁。

<sup>39)</sup> UCDA P150/2259.

左右に割れる中、スバスはダブリン滞在中にその両方との会談や会合に出向いたことになる。もちろんスバスには、アイルランド政治の複雑さや彼の訪問の微妙な立ち位置を理解する術はなかった。

偶然かも知れないが、スバスは共和派内の左右の陣営のバランスをかなりうまく取っていたようで、デ・ヴァレラや政権の閣僚達とも接触し、且つ共和主義者左派、即ちシン・フェインや I.R.A. に繋がる人脈との交流も密に行っていたと言えよう。新聞等では左派グループとの接触の方がやや大きく取り上げられているような印象を受けるが、その後 38 年にロンドンで実現するスバスとデ・ヴァレラの会談にかけた両者の思い入れから判断すると、やや現実政治家の路線を踏襲し始めていたとは言えデ・ヴァレラの実存の意味はスバスにとっては大きなものであった。この会談は英国当局の監視の目が光る中で、ようやく英国への入国が認められたスバスと、英愛貿易協定締結のためにロンドン訪問中のデ・ヴァレラの間で 1 月 15 日の深夜に行われた「密会」であった。英国のリベラル紙 *News Chronicle* (後に右寄りの *Daily Mail* 紙に吸収) は、ロンドン到着時のスバスを「インドのデ・ヴァレラ」と称して紹介している。両者は長時間インドとアイルランドの政治的宿命について話し合ったが、その辺の状況をスバスは逐一ウッズに手紙で報告している。左右両派の共和主義者との会合や集いに明け暮れたスバスのダブリン滞在中で、唯一ヒューマン・ストーリーとして挙げられるのが、2 月 12 日のアイリッシュ・プレス紙でも取り上げられた、J.H. スミス中佐によるスバス滞在ホテルへの突然の訪問である。スミスはビルマのマンダレーにスバスが収監された時の刑務所長であり、政治的意味のない訪問ではあったが、スミスが当時マンダレー地区の衛生管理士 (health officer) であったことを考えると、獄中生活で病に倒れたスバスとは深い関わりがあったことは容易に想像できる。<sup>40)</sup>

ダブリン訪問の最後を飾るシェルボーン・ホテルでのレセプションは、初日のデ・ヴァレラ訪問とともに今回のスバスのダブリン訪問のハイライトであり、スバスの他にアイルランドの有力な左翼活動家であったパダル・オダネルやフランク・ライアン等がスピーチを行っている。スバスの滞在中の活動はアイルランド各紙によって詳細に報道され、特にデ・ヴァレラが設立しそれ故にフィアナ・フォイル支持の立場を維持するアイリッシュ・プレス紙は、スバスのアイルランド訪問をインド・アイルランド関係にとって歴史的重要性を持つものと高く評価し、両国の独立運動におけるナショナリズムの類似性にも注目している。アイルランド滞在中のス

---

<sup>40)</sup> NAI, DFA 105/62. スバスが書いたビルマ刑務所主席監察官宛書簡を見ると、収監中のスバスは、胃弱、脊椎の痛み、不眠症に悩まされ結核を患っていたようであるが、スミスが処方した薬によって病状は若干回復したとある。主席監察官やスミスのスバス達に対する対応は極めて良かったようである。Sisir K. Bose, *Netaji Collected Works, vol. 3: In Burmese Prisons Correspondence May 1923 – July 1926* (Kolkata, 2009), pp. 199-200; Satyam Roychowdhury, ed., *Netaji For You* (Kolkata, 2014), pp. 93-8.

バスのスピーチや会談内容も紹介して、インドがアイルランドの独立闘争から影響を受けてきたことを強調している。スバスにとってアイルランドの反英闘争は、思想的にも戦術的にも大いに参考になる事例であった。余談ではあるが、アイルランド訪問に当たってはスバスの周りに様々な女性が彼の協力者となって登場する。先述のモーリー・ウッズ、モウド・マクブライド、シャーロット・デスパード、ハンナ・スケッフィントン、そしてメアリー・マックスウィニーのみならず、自由国の外交史料や警察記録には、スバスがベルリンの公使館を査証申請に訪れる時は、グラビッシ(Grabisch)夫人と称する人物が彼の同伴者として記載されているし、またスバスがコーヴの港に上陸した時は、フランスから付き添ったデヴリディ(Devridi)夫人及びデヴリディ嬢が一緒であったとある。<sup>41)</sup> また、後にベンガルを中心に問題となるスバスの結婚相手エミーリエ・シェンクルも、元は彼のオーストリアでの秘書であった。後述するシンガポールにおけるインド国民軍女性正規軍部隊ラニー・オブ・ジャンシー連隊(Rani of Jhansi Regiment)の重用も、いかにもスバスらしい対応とも言える。この連隊の連隊長であったラクシュミー・スワミナサンは、その後インド国民軍中佐で戦後インド国民軍裁判に被告として引っ張り出された3人の内の1人プレム・サイガルと結婚している。有名な社会運動・独立運動家の娘であったラクシュミーは、71年にインド共産党に入党し、2002年の大統領選ではアブドゥル・カラームの唯一の対抗馬として擁立されている。インド独立に燃える彼女達には、所謂ファ



ラニー・オブ・ジャンシー連隊の訓練キャンプが置かれたウォータールー・ストリート

<sup>41)</sup> NAI, JUS 8/443 及び NAI, DFA 105/62 (Visa facilities for Mr Subhas Chandra Bose Mayor of Calcutta for travel to I.F.S. Interview with President de Valera 1936)

シズムの欠片も見られない。スバスは、43年7月にインド独立連盟シンガポール支部の女性部大会で演説し、これまでの反英闘争での女性の働きの大きさに言及したのみならず、インド女性が独立闘争で為すべき役割を果たさなければ、インドが自由を獲得することもおぼつかないであろうと力説する。<sup>42)</sup> スバスはアイルランドからインドへの帰路、妻の見舞いに来ていたネルーとスイスのローザンヌで会う。ネルーの妻はボースのローザンヌ滞在中に死亡し、スバスのモーリー・ウッズ宛手紙を見ると、彼もネルーとともに火葬等の手配に駆けずり回ったようである。<sup>43)</sup> 一時的であるにせよ、スバスとネルーの間に気脈が通じるころがあった時期かもしれないが、戦争勃発の予感が漂うヨーロッパで出会った両者の間には既に越えられない壁が出来始めていた。

#### 4. 共産主義とファシズム・ナチズムの間

ネルーは戦争が勃発した場合には民主勢力とともに戦うことを明言しており、ファシズムの協力を得て対英独立闘争を実行しようとするスバスと袂を分かつこととなる。スペイン市民戦争においてもフランコと戦う共和国軍支持のネルーは、ムッソリーニとの面会を拒否している。一方スバスは、先述したようにナチスとの交渉結果は芳しくなかったが、ムッソリーニとの面会において、各種支援をボンベイのイタリア総領事館を通じて行うとの約束を取り付けている。しかし、このようなスバスの姿勢から彼がファシズムやナチズムをイデオロギーとして受け入れ、インド独立闘争の大義名分があるとは言え、ナチス或いは日本の帝国主義戦争に加担していったと短絡的に捉えない方がよい。37年10月の段階でもスバスの反帝国主義的思考に変化はない。インドのインテリ・ナショナリストの論壇でもあるカルカッタの *Modern Review* 誌は、37年10月号で「極東における日本の役割」というタイトルのスバス執筆の長文原稿を掲載しているが、その中でスバスは東アジア情勢に触れ、20世紀の始めアジアにとって指標であった日本が、帝国主義ではなく、中華民国をバラバラにすることなく、他の誇り高き民族に屈辱を与えることなく、自らの目的を達成できなかったのかと問いただしている。西欧帝国主義国家に対峙する日本の立場は大歓迎であるし、日本に関して賞賛するに値することも多々あるが、苦悩の中にある中国に我々の心はともにあり、その戦争の灰の中から中国は不死鳥のごとく立ち上がるであろうとスバスは締め括る。<sup>44)</sup> これは、同年7月に盧溝橋事件が発端となっ

<sup>42)</sup> Subhas Chandra Bose, 'Empire that Rose in a Day will Vanish in a Night', *Netaji Collected Works, vol. 12: Chalo Delhi: Writings and Speeches 1943-1945* (Oxford, 1995), edited by Sisir K. Bose & Sugata Bose, pp. 55-9.

<sup>43)</sup> O'Malley, *Ireland, India and Empire*, Appendix 5, p. 196.

<sup>44)</sup> Subhas Chandra Bose, 'Japan's Role in the Far East', *Netaji Collected Works, vol. 8: Letters, Articles, Speeches and Statements 1933-1937* (Oxford, 1995), edited by Sisir K. Bose & Sugata Bose, pp. 411-429.

た支那事変に素早く反応したスバスの立場表明であるが、ネルーの日本軍国主義批判と類似する。スガタ・ボースも、スバスは日本の帝国主義的な対中政策に批判的で、インド独立がアジアの他国の犠牲の上に成り立つべきでないと考えていたと指摘する。<sup>45)</sup>

ウィーン滞在中にスバスが行ったもう一つの重要なことは、『闘へるインド』の執筆であり、この著書はヨーロッパの批評家の間で、さらには英国メディアでも高く評価された。36年に国民会議派設立50周年を迎えると、スバスは逮捕を覚悟でインドに帰国する。案の定ボンベイに上陸するや逮捕されダージリン地方のクルセオンに投獄されるが、再度健康を害し36年12月にはカルカッタに連れ戻され警察の監視の下で入院することとなる。病状の悪化のため無条件で釈放されたスバスは、37年11月になると今度は英国への訪問を果たす。英国在住インド人学生達からの熱烈な歓迎を受け、英国労働党の幹部とも会合を持つ。療養のためオーストリアに移動したスバスは、当地で自身の高等文官辞退までを扱った自叙伝 *An Indian Pilgrim* を執筆する。この自叙伝は彼の死後ネタージ研究所の文書館に保管され、1980年になって漸く上梓されている。今回のスバスの滞欧期間は長くはなく、献身的働きが評価され一時的にガンディーとの和解が成立したスバスは、38年のグジャラート州ハリプラで国民会議派大会議長に選出される。しかし、滞欧経験が長く当地の指導者との交流があったスバスの世界情勢分析は、ガンディーの主張に代表されるインド大衆は30年の不服従運動に疲れ成功裏に早急な運動の立ち上げが出来る状況にないとする会議派主流の考えとは明らかに違っていた。この頃にはネルーはガンディーの考えに理解を示すようになっており、スバスとの間には大きな溝が出来ていたと言えよう。大会議長としてスピーチに立ったスバスは独立後のインドについて触れ、国家再建に向けた短期及び長期の包括プラン作成のための委員会設置を提唱するとともに、人口問題解決のための早い段階での人口抑制策の必要性にも言及している。しかし大会中、スバスとガンディーやネルーとの距離は益々開いていった。スバスは大戦の始まる前に英国植民地支配に対する全面闘争を開始すべきであると主張したのに対し、ガンディー等の会議派指導層は、インドがまだその準備ができていない段階で運動を立ち上げることを恐れていた。議長としてスバスは、英国政府との妥協を一切認めない立場を明確にし、また経済面では工業化の包括スキーム立案のための国家計画委員会を発足させた。また39年大会議長への再任に関しては、有力指導者の反対にも拘らず再選を実現させたが、このことはナショナリストの間での彼の人気の高さを物語っている。ガンディー推薦の候補に勝利し議長に選出されたスバスはトリプリでの大会で演説し、6ヶ月のうちに世界大戦が始まること、大戦によって英国は非常に困難な状況に置かれること等を予言者のごとく語った。そして、英国政府がインドの完全独立を認めないなら、全インドが独立に向けた闘争を開始するとの最後通牒を英国政府に突きつけること

<sup>45)</sup> 朝日新聞「日印の十字路口」(2006年5月9日)。

を求めた。会議派の体勢はスバスの考えに否定的で、結局彼は 39 年 4 月に議長を辞任している。ガンディー、そしてネルーとの決別が決定的となった瞬間であった。それと同時にスバスは、会議派内の左翼勢力結集のため先述のフォワード・ブロックを結成する。39 年の大戦勃発はインド独立にとっての好機であるとスバスは主張した。確かに英国の困難期はインドにとっての好機であったが、42 年にガンディーがクイット・インディア運動を提唱し英国の秩序ある撤退を求めた時には米国も連合国側に立って参戦し、スバスの主張した独立のためのまたとなない機会は既に失われていた。40 年にドイツ、41 年には日本によって英国は屈辱的敗戦を経験させられるが、このような好機に投獄され独立に向けての運動の手足を縛られるよりは、国外に脱出する方が理にかなっているとスバスが考えるのも無理はない。40 年 7 月スバスは逮捕され、コルカタの自宅からそれほど遠くないプレジデンシー監獄に収監される。牢獄でスバスは殉教者となるべく公然とハンストを始め、監獄内でのスバスの死がもたらす全国的反英運動への影響を恐れた政府は彼に自宅への帰還を許可する。そして 41 年 1 月 16 日未明、ネタージ・パワンからの脱出劇が始まる。スバスの甥シシル・ボースが運転した逃走に使われた車が今日ネタージ・パワンに保存されているが、スバスはカルカッタを出ると、ペンジャブ経由でカブールに到着し、そこでイタリア大使館からオランダ・マツォッタの偽名でパスポートの発給を受け、モスクワ経由でベルリンを目指すこととなる。<sup>46)</sup> カブール駐在イタリア公使クアロニ (Pietro Quaroni) と彼のロシア人妻の協力も特記に値する。<sup>47)</sup>

ベルリンに到着したスバスは、ナチスのインド独立に対する反応が以前の滞在時より好転していることに気付く。これまでナチスは、英国との間に同盟とは言わないまでも和解 (rapprochement) 或いは関係改善を求めているが、独ソ戦の始まりで状況が一変したということである。これまでヒトラーは、英国にとってのインドはドイツにとってのロシアと考え、英国のインド帝国主義支配を容認する傾向があった。<sup>48)</sup> しかし、英国との戦争勃発によって、

<sup>46)</sup> スバス逃走のニュースは、岡崎勝男駐カルカッタ総領事によって 1 月 31 日には外務省に連絡が行っており、打電内容がボンベイやカラチに転電されていることから判断すると、岡崎はこれら 2 都市周辺もスバスの潜伏可能地域と考えていたのかも知れない。柴田在コロombo領事は 3 月 17 日付で松岡洋右外相宛に、スバスがカルカッタから汽船にてセイロンに亡命したとする風説があるが、その真偽は疑わしいと打電している。岡崎総領事は同じく 3 月にスバスの秘書の来訪を受け、フォワード・ブロックは枢軸側の勝利を確信し日本への接近を考えていること、スバス脱出後その機関紙が資金難に陥っており日本商社の広告等によって援助を受けられれば、相当程度日本の宣伝をするとの申し出を受けている。外務省外交史料館、英国内政関係雑纂、属領関係印度ノ部、反英運動関係「S.C.ボースの亡命をめぐって」を参照。ベルリンに着いたスバスは東京に打電、そして岡崎総領事を経由して兄サラトと連絡を取っていた。Sisir Kumar Bose, *The Great Escape* (Calcutta, 2000), pp. 47-8.

<sup>47)</sup> Sugata Bose, *His Majesty's Opponent*, pp. 196-8; Alessandro Quaroni, 'Netaji Oration 2009 — The Kabul Connection: Subhas Chandra Bose, Pietro Quaroni and Indo-Italian Relations', *The Oracle*, vol. xxxii (January 2010), no. 1, pp. 8-16.

<sup>48)</sup> H.R. Trevor-Roper, ed., *Hitler's Table Talk 1941-1944: His Private Conversations* (London, 2000), nos. 11, 17, 20; Romain Hayes, *Subhas Chandra Bose in Nazi Germany: Politics, Intelligence and Propaganda 1941-43* (New York, 2011), p. xxvi.



インドのナショナリスト運動はナチスにとってにわかに利用できるものとなったのである。こうしてスバスはインド独立の夢を国外から推進することになるのであるが、イタリアよりもドイツにインド独立への援助を求めたのは、優秀なドイツの軍事を取り込みたかったからである。しかし最大の課題は、まず指導者ヒトラー及びドイツ政府にインド独立の必然性を認めさせることであった。スバスとヒトラーの会談は 41 年 5 月 28 日に実現している。<sup>49)</sup> ヒトラーはスバスにあらゆる外交特権を与え、また彼の自叙伝『我が闘争』(*Mein Kampf*) 中にあるインドに対する不適切な言葉を削除することにも同意している。

またスバスは、自由インドセンター (Azad Hind Sangha) の下に、プロパガンダ放送局 Azad Hind Radio (ラジオ自由インド) と後にインド解放軍として機能することを予期して軍隊組織自由インド軍 (Free India Legion) を創設する。正式にはインド歩兵 950 連隊であるが、この連隊は暫くするとドイツ軍武装親衛隊 (Waffen-SS) のインド志願軍となることから、形式的にはナチス党或いはヒトラーの私兵の位置づけとなっていたと考えられる。志願軍に入った兵士は、英国によりヨーロッパ戦線に送られヨーロッパやアフリカ戦線でロンメル將軍指揮下のドイツ軍の捕虜となったインド人や欧州在住のインド人であり、スバスの説得によって志願した者達であった。特にアフリカ戦線で枢軸側の捕虜となったインド兵が多く、彼らは当初イタリアにおいて自由インド連隊 (Battaglione Hazad Hindoustan) に組み込まれ枢軸側兵士に仕立てる試みがなされたが、イタリア人士官の下に入ることを好まず失敗に終わる。<sup>50)</sup> ドイツ外務省はスバスが創設したこれらの組織への軍事訓練や財政支援を惜しまなかったが、スバスはこれらの財政支援を貸し付けと理解し独立達成後には返却することを考えていた。また 41 年 11 月に始まったラジオ自由インドの放送は、逃走後安否不明で東京で飛行機事故死したとの噂もあったスバスの声をインド国民に届ける役割をも果たした。放送はインド国民に対する政治教育の場であり、外国支配の不当性、母国に対する国民の義務等が語られた。放送スタッフはインド人で、ドイツ外務省による検閲もなく終戦の時まで中断なく定期的に放送は続けられた。空襲を避けるためにラジオ自由インドはドイツからオランダに移転し、連合国によるオランダ占領が迫ると再びドイツのニーダーザクセン州東部の町ヘルムシュテットに置かれ、スバスが東南アジアに移動した後も放送を継続している。ドイツ外務省においてスバスを助ける任務を帯びていたのは特別インド局 (Sonderreferat Indien) であった。局で日常指揮を執ったのは後にヒトラー暗殺未遂事件に関与するアダム・フォン・トゥロット (Adam von Trott) であり、中央政府と局の連絡調整をおこなったのがケプラー (Wilhelm Keppler) であった。<sup>51)</sup>

<sup>49)</sup> ヒトラーとスバスの会談の写真は、オランダの Nederlands Instituut voor Oorlogsdocumentatie のサイト <http://www.niod.nl> やドイツ連邦公文書館 (Bundesarchiv) の Digitales Bildarchiv で見ることが出来る。

<sup>50)</sup> David Littlejohn, *Foreign Legions of the Third Reich* (San Jose, Calif., 1987), vol. 4. pp. 126-7.

<sup>51)</sup> Krishna Bose, *Netaji A Biography for the Young* (New Delhi, 1995), p. 42.

ザクセン州アナベルクにある捕虜収容所には、ドイツ軍によって捕虜となった英国軍下のインド人兵士が多く収容されていた。彼らや当時ドイツで学んでいた学生或いは若いビジネスマンで自由インド軍は形成されたのである。最終的に自由インド軍は 3500 人の兵力となるが、スバスのこの軍隊がインド解放のみに使われること、ドイツ軍と一緒にインド以外の他の戦線で英国軍との戦闘には駆り出されないという約束をドイツ外務省と交わしていた。<sup>52)</sup> これは同じような取り決めが、ラジオ自由インドについても交わされていたことと類似する。即ち、ラジオ自由インド放送もインドの愛国的解放運動の目的に限定して使われていたということである。ドイツ側がこのように寛大な対応を見せた裏には、筋金入りのナショナリストであるスバスは、簡単に自身の主張を曲げないとの諦めがあったのかも知れない。ある意味 41 年 6 月に独ソ戦が始まるまでは、ドイツにも比較的余裕があったようであるし、スバスと自由インド軍、プロパガンダ放送の存在自体が対英戦で有利に働くことでドイツとしては満足していたのかも知れない。スバスの軍には、シク、ムスリム等様々な階層、宗教、背景を持つ兵士が加わっていたが、彼らの間にはジャイ・ヒンド (Jai Hind 即ち Hail India) のスローガンの中で、違いを超えて団結することが求められた。インド英軍のグルカ連隊、シク連隊、ジャット連隊等地域によって区別され帝国主義に奉仕する軍隊ではなく、将来独立後のインド軍の中核となるべくインド全体の利益のために設置された軍隊であった。スバスは宗教やカーストの壁を超えて自由インド軍や東南アジアでのインド国民軍を編成しようとしたが、もし戦後スバスがインド建国に関与していたとしたら、パキスタンの分離独立は回避できたとの見解もある。

ところでスバスとナチズムの関わりであるが、スバスが共産主義に傾倒したのか、それともファシズムのような全体主義的傾向があったのかとの疑問については、しばしば議論が繰り返されてきた。より簡潔に言えば、彼は左翼だったのか右翼だったのかとの議論に類似したところがある。彼は国民会議派の体制派に対する運動ではネルー等とともに左翼指導者の 1 人と見なされている。35 年のインド政治情報局の報告では、スバスはコミンテルンのインド代表であったマナベンドラ・ロイのような共産主義者と接触していたようである。しかし、インドにおける共産主義の興隆を過度に警戒するインド政治情報局ではあったが、彼等はスバスが共産主義に完全に傾斜しているとは見なしていなかった。<sup>53)</sup> それは、共産主義がナショナリズムや宗教とは距離を置いていたからである。スバスにとってナショナリズムと宗教は自身の存在と

---

<sup>52)</sup> 但し、訓練中にインド軍が偶然敵軍に遭遇した場合には、自己防衛のために交戦が許されるとの取決めがあったようである。Muller, *Subhas Chandra Bose and Indian Freedom Struggle*, p. 51. しかし、ドイツ連邦公文書館の写真の中には、インド軍が明らかに「大西洋の壁」(Atlantikwall) やフランス南西部の防衛に当たっている写真が存在する。そのいくつかは Hayes, *Subhas Chandra Bose in Nazi Germany* に掲載されている。

<sup>53)</sup> 共産主義者も、スバスやネルー等国民会議派左派が革命の言葉を使用してブルジョアの政策を推進しており、それによって大衆革命闘争を混乱させていると警戒していた。Harkishan Singh Surjeet, et al., eds, *History of the Communist Movement in India* (New Delhi, 2005), p. 201.



現在のラーマクリシュナ・ミッション

活動の核心を形成しているし、両者は密接に関係している。先述のように、スバスは 15 歳の頃からラーマクリシュナの弟子スワミ・ヴィヴェーカーナンダの教えに共感を覚えていたが、スバスが自由インド仮政府の樹立を宣言したシンガポールでも、ヴィヴェーカーナンダ等が 1897 年に創設したラーマクリシュナ・ミッションに出入りしていた。シンガポールでは一日の仕事が終わると現在のリトル・インディアにあるラーマクリシュナ・ミッションに車で駆けつけ、軍服をシルクの腰布ドウティに着替えるとしばし瞑想に耽り活力を取り戻していた。ラーマクリシュナ・ミッションは伝道と慈善活動に重きを置き、無償且つ無私の精神で社会に奉仕することを目指していたが、スバスは結局その奉仕の対象を国家インドと考え無私の精神で国家に奉仕することを理想と考えていた。その意味では彼の宗教は、彼のナショナリズムと密接に関連し、その基礎を形成していたことになる。そしてこのようなナショナリズムを基盤にする独立運動が成功した暁には、スバスは本来対照的な共産主義とファシズムの共通項に着目し、それらを整理してインド国家形成の礎にしようとした形跡がある。このような考えは彼の著書『闘へるインド』の中で紹介されているのであるが、個人に対する国家の優位、議会制民主主義批判、党独裁、計画的産業再編等両者の共通項を統合の教義（Samyavada）としてインドの将来の国家形成に役立てようとした彼の気概が伝わってくる。<sup>54)</sup>

<sup>54)</sup> Subhas Chandra Bose, *The Indian Struggle 1920-42* (Oxford, 1997) edited by Sisir Kumar Bose & Sugata Bose (Netaji: Collected Works volume 2), pp. 351-2; Sugata Bose, *His Majesty's Opponent*, pp. 88-9.

スバスはマルキシズムをインドに導入する場合の問題点として、共産主義がナショナリズムに対して同情的でないこと、反宗教的且つ無神論的であること（即ちインドでは、国の覚醒は多くの場合宗教的改革や文化的復興がその先駆けとなってきた）、唯物史観論の問題、通貨問題に関して何ら解決策を持っていないこと、共産主義が労働者階級を強調するのに対しインドの課題は労働者というよりは農民問題であること、人間生活の中で経済的要素の重要性が強調され過ぎること等を挙げている。<sup>55)</sup> それに対しスバスの統合の教義は、ナショナリズムの感情にも配慮した社会主義（所謂民族主義的社会主義）を標榜し、物質と精神、西洋と東洋等の間にも均衡をもたらそうとしている。スバスが社会主義とファシズムの融合に最初に触れたのは、カルカッタ市長就任演説の中であった。社会主義の正義、平等、愛の精神とファシズムの持つ効率や規律の統合によって新しいインド社会を創設しようとしたのであるが、このような考えの基礎を作ったのが、30年のコルカタ・アリポール監獄収監中に読んだフランチェスコ・ニッティ（Francesco Nitti）著 *Bolshevism, Fascism and Democracy* とイヴァノエ・ボノーミ（Ivanoe Bonomi）著 *From Socialism to Fascism* の2つの著書であった。<sup>56)</sup> 両著者はイタリア首相まで務めた大物政治家であるが、ムッソリーニのファシスト政権に対しては批判的立場を維持した。しかし、両者ともに、ファシズムが階級間や産業間の闘争を減少させ、秩序と規律、愛国心を回復させたことに関しては評価を与えている。漸進的な社会変革を標榜するフェビアン主義の立場に立ちファシズムを毛嫌いするネルーに対して、スバスのファシズムに対する関心は、ナチズムではなくイタリアのムッソリーニであり、両者は何度か親しく会談をしている。スバスがムッソリーニと歓談した33年から36年の間の彼の渡欧目的の1つは、ヴェルサイユ体制下の欧州情勢の視察であったが、スバスはこの旧体制の象徴とも言うべき国際連盟が英仏に支配され、インド独立のために連盟を利用することは不可能であると悟っていた。<sup>57)</sup> しかし注意すべきは、スバスが『闘へるインド』の執筆を終えたのはイタリアによるエチオピア侵攻の前であり、まだファシズムが帝国主義的侵攻の牙を剥く前であった。38年1月24日にロンドンの *Daily Worker* 紙に掲載されたスバスとのインタビュー記事は、スバスのその頃の心境を明らかにしている。<sup>58)</sup> スバスによると、彼の政治思想は『闘へるインド』執筆以来進

<sup>55)</sup> Bose, *The Indian Struggle 1920-42*, pp. 352-3; Ramchandra Sakharam Ruiker, *Thesis of the All India Forward Bloc* (Calcutta, 1949).

<sup>56)</sup> Leonard A. Gordon, *Brothers against the Raj*, p. 235.

<sup>57)</sup> Bose, *The Indian Struggle*, pp. 364-5; Bose, 'Meeting the Press: Situation in India, India and Germany, League of Nations', *Netaji Collected Works, vol. 8: Letters, Articles, Speeches and Statements 1933-1937*, pp. 346-7.

<sup>58)</sup> *Ibid.*, p. 398-9 (Appendix 'The Indian Struggle: Questions Answered'). このインタビュー記事について、アンドリュー・モンゴメリーは「ファシズムに関するスバスの積極的発言の中での唯一の言い訳」とやや突き放した解釈をしている。Andrew Montgomery, 'Subhas Chandra Bose and India's Struggle for Independence', *The Journal of Historical Review*, vol. 14, no. 2, pp. 2-5. この論文でモンゴメリーは、インド独立運動家でインド・レストラン「ナイル」の創業者A.M. ナイル (A.M. Nair) のスバス観に言及し、

化しており、彼が「共産主義とファシズムの融合」という表現を使って本当に言いたかったのは、インドが国としての自由を求め、その自由を獲得した後は社会主義の方向に向かうということである。このような両イデオロギーの融合という表現は、当時の情勢を考えるとあまり適切なものではなかったが、『闘へるインド』執筆中にはファシズムはまだ帝国主義的侵略を開始しておらず、単に攻撃的なナショナリズムに思えたスバスの返答は振り返る。このような告白は言いつけのように聞こえなくもないが、ファシズムの変容ぶりにスバス自身がかなり困惑していた様子を表しているようにも聞こえる。

ファシズムの帝国主義的傾斜に積然としないものを感じつつも枢軸国の援助を得て反英闘争に邁進したスバスの外交政策の基本は、45年5月の彼のバンコクでの演説にあるように「英国の敵はインドの友」であるとの原則に尽きる。この演説自体は終戦間近の時期になされたものであるが、実はこれはインド高等文官就任辞退の頃からスバスが持ち続けてきた信念であった。スバスの指導者としてのスタイルは、ファシストが陥る独善性からはかけ離れ、時にヒトラーのような礼賛・崇拜を強いるものでもなく至って民主的である。但し、43年7月にインド独立連盟 (Indian Independence League) 総裁となりインド国民軍を指揮下に収めてからのスバスは、彼に対する個人崇拜を認めるようになったと言われる。しかし、戦時体制のこの時期に、自由インド仮政府の軍隊であるインド国民軍を指揮するに当たって、スバスに対し民主的対応を期待する方が非現実的である。スバスは戦時期のみならず、独立達成後のインド社会の戦後改革まで思考を巡らし、フランス革命のような混乱を回避するため法と秩序を確立させた体制が必要であると主張した。そのため個人の自由を重きを置くりベラリズムよりは、社会的目標達成に向かって権力を一党に集中させる権威主義的政治体制が独立後のしばらくは必要であると考えていた。経済においては計画経済社会であるが、正にスバスよりは「民主主義的」であったネルーが戦後採用した経済政策であった。スバスは、第1次世界大戦前のロシアがインドと同じような貧困農業社会だったのが、近年工業化を果たした背景には計画的工業化があったと指摘する。<sup>59)</sup> インドのような多種多様な要素が交じり合った混沌社会を統制するには、強力な国

---

ナイルの著書 *An Indian Freedom Fighter in Japan* (邦訳『知られざるインド独立闘争—A.M. ナイル回想録』1983年、風濤社) の中ではビハーリー・ボースは好意的に描かれている反面、スバスについては結局ファシストであったと断定し冷たく扱っていると紹介している。確かにナイルの書における彼のスバス評はやや手厳しい。「軍服などと言った権威の象徴は、ラシュ・ビハリには無用のものだった。かれは生まれながらの指導者で、スバスとは違って、地位を誇示するようなものなど必要としなかった。」との記述にあるように、ナイルはビハーリーに対しては、インド独立運動のために日本で苦勞した同輩として極めて高い評価をしている一方で、日本政府や日本軍に近いビハーリーに比べスバスは日本の状況が理解できていないとの判断となりがちである。一方、全く違ったナイルのスバス評が、あるインド人外交官の記事の中にあり、ナイルはスバスに魅了されスバスの通訳として働くために勉学を諦めようとしたと紹介している。T.P. Sreenivasan, "The Man Who Knew Netaji", *Rediff India Abroad* (January 23, 2006). ナイルは戦後パル判事の通訳も務めている。

<sup>59)</sup> Subhas Chandra Bose, *Congress President Speeches, Articles, and Letters January 1938 – May 1939* (Kolkata, 1995) edited by Sisir Kumar Bose & Sugata Bose (Netaji: Collected Works volume 9), pp. 50-1.

家体制の創設が必要であるとスバスは考えており、分権指向のガンディーとは一線を画した。<sup>60)</sup>

## 5. 東南アジアのスバス

ナチスの援助に失望し始めていたスバスは、日本の駐独大使大島浩と接触して日本行きを希望を伝える。ヨーロッパの戦況はドイツに不利になっており、一方日本軍はインドにもう一歩というビルマまで部隊を進めてきていたからである。しかし日本は、ビハーリー・ボースを支援してきた関係で、簡単にスバス招聘というわけにはいかなかった。<sup>61)</sup> 結局スバスは、43年4月にやっとドイツ海軍潜水艦でマダガスカル島東南海域に移送され、そこで帝国海軍の伊号第29潜水艦に引き渡された後、スマトラ島に隣接するサバン島に上陸する。<sup>62)</sup> 上記シャーム・ベネガル監督映画では、サバン島上陸時のスバスが日本の特務機関であった光機関長藤原岩市の出迎えを受けるシーンがあるが、実際に出迎えたのはこの時の光機関長でベルリン滞在中親しく交流を持った大島敏大佐であった。中国国民党軍のような軍服を着た藤原がスバスを迎える映画の場面は、インド国民軍の間でも信頼されていたF機関（光機関の前身岩畔機関の前に組織された諜報工作機関）機関長であった藤原岩市の実像を裏切る描写である。藤原はF機関を



リトル・インディアに隣接する現在のフェラー・パーク

<sup>60)</sup> Bidyut Chakrabarty, *Subhas Chandra Bose and Middle Class Radicalism* (London, 1990), p. 160.

<sup>61)</sup> 丸山静雄『インド国民軍 —もう一つの太平洋戦争—』岩波新書 315、70-1頁。

<sup>62)</sup> 移送作戦の詳細は、米田文孝、秋山暁勲「伊号第29潜水艦とスバス・チャンドラ・ボース」『関西大学博物館紀要』第8号（2002年3月）、1-57頁を参照。

率い、マレー作戦時から英印軍捕虜がインド国民軍に志願していく過程で、インド国民軍士官にも信頼され大きな役割を果たした。42年2月15日のシンガポール陥落直後、市内リトル・インディアに隣接して広がるフェラー・パークでの英軍からの接收式で、藤原は4万5千人ものインド兵の前で演説を行い、その中で日本は一切の野心がなく、インド国民軍や独立連盟の活動に敬意を表し、インド兵を友愛の念をもって遇すると語りこの段階では俘虜であったインド兵の喝采を浴びている。<sup>63)</sup> ところでスバスは、サバン島上陸後暫くして43年6月に東条英機と会談している。当初東条はスバスとの会談に乗り気ではなかったが、会談後はすっかりスバスの魅力の虜になってしまったようである。この頃日本側とインド独立連盟・インド国民軍との関係は非常に悪化しており、F機関とインド国民軍の信頼関係にも暗雲が漂っていた。このような状況の立て直しは大物政治家スバス以外には不可能であったが、これまで日本側にはそのようなスバスの力量に対する評価が欠如していた。

日本軍のマレー作戦に当たりインド独立連盟が英印軍のインド兵に反英独立機運を醸成することに努め、そのような連盟の努力をインド工作を一任されたF機関が援助する取り決めが成立していたが、日本側とインド側には基本的考え方の違いが露呈しかかっていた。即ち、インド側が日本軍への作戦協力をインド独立のための手段と見なすのに対し、日本側はインド独立を最終目標としつつも、当面の重点をインド兵の作戦協力に置き、インド工作を戦場謀略と理解していたという相違である。<sup>64)</sup> マレー作戦及びシンガポール陥落の結果多数のインド兵捕虜が生み出され、彼らを收容し且つ統括するためにはF機関の組織では間に合わず、新しく岩畔機関という大型機関が創設された。単なる捕虜部隊からインド国民軍編成に大きな働きをしたのはモハン・シン大尉 (Mohan Singh) であり、彼と藤原の間には強い信頼関係があった。マレー作戦が終了し大量のインド兵が捕虜として收容されたために、インド国民軍と独立連盟の方向性を明確にする必要があり、その意味でも42年3月末に開催された東京山王会議は大きな意味を持っていた。東京山王会議では、ビハーリー・ボース等の「東京グループ」とインド国民軍を率いるモハン・シン大尉等の「南方グループ」が対立し、モハン・シン等は「東京グループ」が日本側にべったりであり自主性に乏しいと批判する。対立の根源は日本の大本営にあり、大本営はビハーリーを押し立てて独立連盟と国民軍への工作を行おうとした。日本側には、ビハーリーは長年の日本在任期間の付き合いもあり御しやすい軍の意向を通しやすいとの印象があった。大本営は対インド施策を謀略工作と見る傾向があり、民族独立の精神が旺盛で

<sup>63)</sup> 国塚一乗『インパールを越えて F機関とチャンドラ・ボースの夢』講談社、99-103頁；藤原岩市『F機関 アジア解放を夢みた特務機関長の手記』バジリコ (株)、216-27頁。このフェラー・パークでの接收式は、戦後インド国民軍がデリーで裁かれた軍事裁判の結果にも影響を与えている。国民軍側弁護士は、英印軍のインド兵が英軍参謀 J.C. ハントによって日本側に家畜のように引き渡された時点で、彼等の英国国王に対する忠誠の義務は破棄されたと解釈されると主張している。

<sup>64)</sup> 丸山静雄『インド国民軍』、61頁。

日本の意向に従わないモハン・シンを厄介な存在と見ていたようである。

このような状況下、本国の大本営と現地のインド国民軍の間に立って苦悶し調整を行うのは、本来ならば岩畔機関であるが、F 機関と比べ前者は誠心誠意インド側と向き合うことなく、モハン・シンはその後岩畔機関に不信感を抱き続ける。6月15日から開かれたバンコク会議では、ビハーリーが独立連盟会長に選出され、国民軍は独立連盟の軍とされビハーリーが最高指揮官となった。しかし、国民軍を独立連盟と同列においていたモハン・シンの国民軍は、国民軍が連盟の下に置かれたことに不満であった。対英戦という同じ土俵に立ちながら、インド独立運動、そのためのインド侵攻に向けての思いや戦術の違いは、日印、さらには独立連盟と国民軍の間に亀裂を生みだし、結局日本側はモハン・シンの罷免という荒療治で対応し、彼をジョホール水道のウビン島に拘留している。<sup>65)</sup> インド兵は抗議の意味で再度捕虜の状態に戻りモハン・シン支持の立場を鮮明にした。日本軍もインド兵を抑圧することはせず、日本軍との流血の衝突は避けられた。このような状況下シンガポールに上陸したスバスは、モハン・シンの救済には動かなかった。メヘルヴァン・シンの証言によると、スバスはインド独立の方が重要であり、モハン・シン1人のために日本とは争わないとの結論であった。<sup>66)</sup> 日本側は、モハン・シンやこれから登壇するスバスのナショナリズムの性格をきっちりと把握していなかった。インド人と一緒になってインド独立の夢を見た理想主義的なF 機関と比べ、岩畔機関は事務的且つ現実主義的でインド国民軍を謀略工作の文脈でしか考えておらず、国民軍や独立連盟の諸事にしばしば介入したようである。大本営も独立連盟や国民軍との関係悪化に直面するとビハーリーに問題処理を押し付けて、積極的にインド側との間に横たわる蟻を払拭しようとはしなかった。このような崩壊寸前の国民軍を救ったのはスバスの東南アジア到着であり、さらにはスバス到着までの期間に見事国民軍を立て直したボンスレー中佐の活躍であった。ビハーリーもナイル

---

<sup>65)</sup> 国塚一乗『インパールを超えて』、104-130 頁及び丸山静雄『インド国民軍』、46-62 頁。『インド国民軍を支えた日本人たち』明成社にある元 F 機関員伊藤啓介の証言も参考になる。シンガポールの国立文書館での調査で、モハン・シンはウビン島に収監されたとの情報があったのでウビン島実地調査を行ったが、収監場所は一部シーフード・レストランになっている。島民に日本占領時代の刑務所跡を尋ねても、返ってくる答えは当時の日本軍によるチャンギ海岸等シンガポール島東部における日本軍による残虐行為の話が多かった。シンガポール陥落直後の華僑に対する日本軍の残虐行為は、多くの作戦失敗にもかかわらずなぜか「作戦の神様」と呼ばれた作戦参謀辻政信の責任と言われるが、彼は終戦直後の戦犯裁判を上手く逃れ、戦後は61年にラオスで失踪するまで政界に入っている。「日本占領時期死難人民記念碑」建立に見られるように、シンガポール華人社会の日本占領期にたいする評価は今も厳しいし、シンガポール華人はスバスを日本の協力者と見ている。高くそびえるこの記念碑に比べると、近くに建つインド国民軍記念碑は小さくて遊歩道に溶け込んでいる。George Yeo, 'Subhas Chandra Bose and Singapore', *Netaji Subhas Chandra Bose: The Singapore Saga* (Singapore, 2011), ed., Nalanda-Sriwijaya Centre, ISEAS, p. 4. 同盟国に対して表立った批判はしなかったが、日本軍の暴発をスバスも内心苦々しく思っていたはずである。

<sup>66)</sup> National Archives of Singapore (NAS), Oral History Interviews, Accession no. 000553 Mehervan Singh 証言。メヘルヴァン・シンは独立連盟と国民軍の関係について、両者は民間の支援部隊と軍の戦闘部隊の関係であり、連盟が東南アジアで新兵を補充した結果、国民軍には英印軍の捕虜よりも東南アジアで志願した地元インド人の方が多くなったと証言している。シンガポール国立文書館での調査では、ガヤトゥリー・カウル・ギル (Gayathri Kaur Gill) 女史の協力を得た。



もボンスレーの力量には一目置いていた。ちょうどこの頃岩畔機関は光機関となり、新機関長にスバスの来日工作をした山本敏大佐が就任している。<sup>67)</sup>

スバスは、日本占領によって昭南島と呼ばれるようになったシンガポールに 43 年 7 月に到着する。1965 年のシンガポール独立前の 2 大事件は、スタンフォード・ラッセルとスバスのシンガポール上陸であるとの意見もあるが、両者ともカルカッタとは縁が深く、ラッセルはカルカッタの東インド会社からシンガポールに貿易基地を設置する許可を得て 1819 年に上陸している。<sup>68)</sup> ビハーリーから独立連盟総裁職を引き継いだ後、スバスの国民軍最高司令官就任記念式が市庁舎前広場で挙行される。ビハーリーからスバスへの連盟の権限移譲は速やかに且つ平穏になされたと思われる。ビハーリーは、連盟の目的が英国帝国主義への武装闘争という新しい局面に入ったとして、指導者の交代を正当化する。<sup>69)</sup> ビハーリーの日本での同志であった A.M. ナイルと比べ、ビハーリーはスバスの力量と誠意に信頼を置いていた。チェロ・デリーの歓声の中、インド国民軍の編成が宣言され各部隊が分列体形で市庁舎前を行進した。数日後には婦人正規軍部隊ラニー・オブ・ジャンシー連隊が昭南に結成される。1857 年に英国軍と戦い戦死したジャンシー国の王妃にちなんで名付けられた部隊であり、連隊長には女医のラク



インド国民軍が行進したシンガポール市庁舎前広場

<sup>67)</sup> ナイル『知られざるインド独立闘争』、265-6 頁；国塚一乗『インパールを超えて』、134-7 頁、Shahnawaz Khan, *My Memories of I.N.A. & its Netaji* (Delhi, 1946), pp. 51-2.

<sup>68)</sup> K. Kesavapany, 'Bose and the Linked Histories of Singapore and India', *Netaji Subhas Chandra Bose: The Singapore Saga*, p. 5.

<sup>69)</sup> Sisir Kumar Bose, *Netaji Subhas Chandra Bose*, pp. 126-7.



スバスが講演したチュラロンコン大学の講堂

シュミー・スワミナサン女史が任命される。この部隊の士官は、マラヤやビルマの英語教育を受けた中流、上流階級出身の女子であった。その間スバスはしばしばタイを訪問し、首相のブレック・ピブーンソンクラームと会談し当地のインド社会やインド国民軍と接触している。さらに、バンコクの病院やチュラロンコン大学に寄付をして大学講堂で講演も行っている。<sup>70)</sup> スバスには、東南アジアのインド人社会をまとめ上げ独立連盟と国民軍への支援を確かなものとし、さらにビルマへの通路に当たるタイとの関係を確固たるものにする目的があったと考えられる。10月21日にシンガポールのキャセイ劇場で自由インド仮政府の樹立が宣言され、その直後日本を始め枢軸国や大東亜共栄圏構想に傾斜する諸国が仮政府承認を行っている。<sup>71)</sup> 11月には東京で大東亜会議が開かれ、スバスもオブザーバーの資格で参加している。オブザーバー参加はインドを大東亜共栄圏とは区別するスバスの意思であり、インド人民の承認のない決定にコミットしないための、またネルー主導の国民会議派からスバスが日本の傀儡となったとの

<sup>70)</sup> Nilanjana Sengupta, *A Gentleman's Word: The Legacy of Subhas Chandra Bose in Southeast Asia* (Singapore, 2012), pp. 58-9; Netaji Research Bureau, *Netaji A Pictorial Biography* (Kolkata, 2013), p. 160. ラニー・オブ・ジャンシー部隊の詳細は Joyce Chapman Lebra, *Women against the Raj* (Singapore, 2008) を参照。

<sup>71)</sup> アイルランド自由国政府による正式承認はなかったが、12月2日付の同盟通信を引用してドイツの *Deutsche Allgemeine Zeitung* 紙は、仮政府にアイルランド共和主義者からの資金援助とアイルランド政府からの祝辞が送られてきたことを伝えている。Green, 'The Indian National Army Trials', p. 48. 仮政府樹立やシンガポール市庁舎前での国民軍閲兵の様子は、シンガポール国立文書館 (<http://www.nas.gov.sg/nas>) の archives online の公開写真で見ることができる。写真の他に同文書館の oral history interviews には、スバスや国民軍に関する多数の音声証言が集められネット上で検索できる。



正面が当時のまま保存されたキャセイ劇場

誹りを受けないための予防措置であった。<sup>72)</sup> 会議でのスバスの演説は好評であったが、その翌日日本は、日本軍が占領中のアンダマン、ニコバル諸島の仮政府への帰属を決定する。44年に入るとスバスはビルマ進出を果たし、仮政府をシンガポールからラングーンに移す。南方軍第15軍によるインパール作戦でインドへの武力侵攻が実現するという可能性に期待し、スバスの国民軍は日本軍との共同作戦を展開する。しかし、途中指揮権問題等様々な困難が露呈する。スバスは国民軍が日本軍と対等の作戦協力部隊であることを主張し、国民軍が日本軍の統一指揮系統下に入ることに反対するが、最終的には日本軍の兵団長以上が国民軍を指揮することには同意する。スバスはインパール占領後の突進作戦で、国民軍を直接チッタゴン攻撃に振り向けることを希望したが、説得されてまず第15軍との共同作戦に同意する。<sup>73)</sup> チッタゴンは、30年4月にインド反乱軍が英軍のチッタゴン兵器庫を襲撃した反英闘争の象徴的場所であることも、スバスの脳裏にあったのかも知れない。

補給をないがしろにして多くの死傷者を出した第15軍司令官牟田口廉也中将指揮のインパール作戦の悲劇にはここでは言及しない。雨期のビルマ山間部を超えての撤退で多くの将兵の犠牲を見た日本軍とインド国民軍であったが、非戦闘員にラングーンの防衛を任せて逃げ出したビルマ方面軍司令官木村兵太郎には、前線で最後まで国民軍将兵と行動を共にしたスバス

<sup>72)</sup> John A. Thivy, *The Struggle in East Asia* (Calcutta, 1971), p. 60.

<sup>73)</sup> 丸山静雄『インド国民軍』、80-91頁。

も驚愕し呆れ果てた。<sup>74)</sup> 日本軍は満州でも終戦時に民間人を置き去りにする醜態を演じたが、この事件はまだ終戦のかなり前の状況での逃亡であった。逃亡劇にも拘らず木村は陸軍大将に昇進したが、A級戦犯として絞首刑となり後に靖国神社に合祀されている。一方、日本軍関係者の証言によると、彼等のスバスに対する評価は極めて高く彼の信奉者になった者もいたとのことである。代表例として光機関に所属した阿部武彦の証言を読むと、スバスは常に偉大な指導者として平静を維持できる心の豊かさを持った人物と評されている。<sup>75)</sup> さらにここでは、ビルマをめぐる2人のインド人の動きに着目したい。まずネルーであるが、スバスの軍がインド解放の口実を持ってビルマからインドに侵攻した場合どうするかと聞かれたネルーは、スバス達の自由インドに対する熱意は疑わないが、彼等の侵略行為に対しては躊躇なく抵抗すると述べている。<sup>76)</sup> ネルーの言葉は、インド国民軍がインド侵攻を果たした時には、それに呼応する形でインド民衆がインド国内で蜂起するとしたスバスが描くシナリオを覆すものである。しかし、ネルーも46年のシンガポール訪問時には国民軍記念碑に花輪を供えており、このことはネルーが独立闘争でのスバスと国民軍の貢献を評価している証拠である。もう一つは、戦後まもなくしてスバスの兄サラト・ボースがビルマを訪問した時のエピソードである。サラトの訪問の目的は敗戦後突然解隊された国民軍の士気を高めるためと、個人的にスバスの最後の生きた記憶を確かめるためであった。サラトは、大戦中日本軍とともに対英戦を戦いながら翻意して終戦直前の3月に抗日戦を仕掛けたアウンサン将軍(アウンサン・スーチーの父)の歓迎を受ける。アウンサンは、40年に初めてカルカッタでスバスと会う前から彼の『闘へるインド』等の著書を読んでいて、戦争中何度もスバスとコンタクトを持ちお互いの中には完全な相互信頼があったこと等に触れている。翻意して日本軍と戦ったアウンサンも、スバスに対する敬愛の念を抱いていたようである。<sup>77)</sup>

アジアでの反英独立闘争へのスバスの登壇はあまりにも遅すぎた。既に戦況は日本にとって圧倒的に不利であり、しかも日本はその戦力の大半を太平洋における米国との戦いに費やしており、ビルマからインドに侵攻するというスバスの願望に答えることは戦略的にも物質的にも不可能であった。結果としてスバスの能力とインド侵攻への強い意志、さらには彼の人望と組織力を無にした責任の大半は日本側にある。大本営は当初インドを大東亜共栄圏の外に位置づけ、インド独立支援が戦争遂行に果たす意味についても国家的戦略を欠いていたと言えよう。<sup>78)</sup> 日

<sup>74)</sup> 国塚一乗『インパールを超えて』、202頁。

<sup>75)</sup> 長崎暢子他、『資料集 インド国民軍関係者聞き書き』1巻、26-34頁。

<sup>76)</sup> Green, 'The Indian National Army Trials', pp. 3-4.

<sup>77)</sup> Sengupta, *A Gentleman's Word*, pp. 135-6. アウンサンとスバスの類似点及び相違点については、Christopher A. Bayly, 'The Netaji Oration, January 2007. The Eve of Freedom: Subhas Bose and Aung San', *The Oracle*, vol. xxx (January 2008), no. 1, pp. 23-32.

<sup>78)</sup> 稲垣武『革命家チャンドラ・ボース』光人社、4-6頁。

本との協力関係はスバスにとって悲惨な結果に終わったが、東南アジアで結成された国民軍と戦後彼らをめぐる裁判が、インド独立の最大の切っ掛けを作り出したことに疑いの余地はない。さらに国民軍の活躍によって、英印軍におけるインド兵の英人指揮官への忠誠心が低下した事実も英国がインドを手放す要因でもあった。<sup>79)</sup> スバス自身インドに凱旋することはできなかったが、国民軍はインド民衆の蜂起というスバスが描いた通りの結果を生み出した。

---

<sup>79)</sup> 国塚一乗『インパールを超えて』、248頁。